carvaly

新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃａｒｖａｌｙ

【Ｎコード】
Ｎ６８１３Ｘ

【作者名】
新兎

【あらすじ】
人形（ドール）とそれに関わる人たちの連作風短編です。ブログからのお引越し。

1

「これは……また派手にやったわね」

目の前に置かれたスクラップを見ながら呆れたように彼女が言う。

「別にいいじゃん。どっちみち壊すんだし」

肩から吊ったライフルを持て余しながら呟く。

「ウーノの持ってくるロボットの照合が、どうして私に回されるか分かる？」

「さぁ？　なんでなのケイちゃん」

問うと、彼女――ケイは一呼吸置くと静かに続けた。

「こんな壊し方するヤツは頭がぶっ飛んでる。

いつこっちに向かってライフルをぶっ放すか分からないってさ」

言われて、あたしは笑った。

「そのぶっ飛んだヤツがあんたたちの仕事の手伝いをしているんだけどね」

「ま、おかげでこっちは楽できるわ。ありがたいことで」

ケイちゃんはそう言ってニヤリと笑うと、スクラップの確認を始めた。

身の回りにロボットがいる生活が当たり前になってから彼女たち警察の仕事は１つ増えた。
新しい型が出る度に買い換えられ捨てられるロボット。
ロボットの処理場は存在していたがそれは大した意味をなさず、街の至るところで違法廃棄されたロボットが転がった。その中にはまだ自律的に動くことができるロボットも少なくはなかった。
そういった違法廃棄ロボットの管理担当は、本来ならば警察機構の役割だったが、ロボット以上に厄介な、人間という種族を相手にしている当の警察にそんなくだらないことをする余裕はなく、いつのまにか警察の代わりに違法廃棄されたロボットをスクラップにして届ける壊し屋という職業がうまれた。
それが今のあたしの仕事というやつだ。

「よし、確認とれたわよ。報酬はいつもの口座でいいのよね？」
「うん、よろしく」

いつも通りのやり取り。書類にサインをして本日の仕事終了。
ケイちゃんにサイン済みの書類を渡す。

「ほい、お疲れ様――あ、そういえばウーノにちょっと頼みがあったんだけど」
「頼み？　ケイちゃんがあたしに？」
「ロボットの捜索なんだけどね。どうする？」

壊し屋の副業としてロボットの捜索を頼まれることはよくあることで、あたしは大抵断ったことがない。だから、どうして彼女が念を押すようにそういったのかが少し引っかかった。

「捜索でしょ、やるよ」
「じゃぁ、これ資料」

ケイちゃんはあたしから受け取った書類をしまうと、デスクからファイリングされた資料を取り出す。かなり分厚い。
資料を受け取る＝仕事を引き受けること。あたしは、その分厚さにうんざりしながらそれを受け取った。

この街の区画を上・中・下の3つに分けるとすると、あたしの住んでいる場所は最悪なまでに中途半端な中ランクにあたる。それをさらに細かく3つに分類しても、また中ランクだから救いようがない。
かといって、あたしがこの場所を気にいっていないかといえば決してそうではない。
この区画は人口が爆発的に増えたこの星でもっとも人口密度が低いらしい。
人間は中途半端なものを嫌うといったとこだろうか。おかげでこの区画は単純に他人と接するのが苦手な人間が好んで住むようになった。
つまり、仕事以外で他人と関わりを持ちたくなく、中途半端に生を消費するあたしには、もっとも好都合な場所だったのだ。

街中に張り巡らされた自動走路（オートロード）に乗って家路につく。その途中であたしは仕事用の銃弾を買い忘れていたことに気づいた。
一旦、自動走路（オートロード）から降り、ジャンクシティに向かう走路に乗り換える。
ジャンクシティには、鉄くずの集まりのような雑然とした建造物が立ち並んでいる。いつ来てもそこだけ別世界のような印象を与える場所だ。
あまり長居する気もなかったのであたしはさっさと銃器屋へ足を運び、目当ての物を買い揃え足早てに走路乗り場に引き返した。

途中、ふと安っぽいライトに照らし出された中古の人形屋（ドールショップ）の看板が目に留まった。
ショーウインドウには、主に捨てられたたくさんの人形（ドール）たちが立ち並んでいる。
人形（ドール）とは、擬似恋愛用のためにつくられたロボットのことだ。こういう物を見るたびにつくづく人間の欲望とはすごいと思わされる。

最新型よりも少しだけ型の古い人形（ドール）たちが、あたしの視線を感知したのか、一斉に顔をこちらに向け、まるで街娼がするような媚びた笑顔をつくった。
基礎プログラム通りの行動だが、それはまるで誰かに買ってもらわねば自分たちはスクラップにされることを知っているかのように見えた。

普段なら湧き上がる嫌悪感からそのまま素通りをするはずなのに、なぜかあたしの足はその場でぴたりと止まった。
たくさんの笑顔の中に１つだけ妙に不自然な笑顔があることに気づいたからだ。
その笑顔を浮かべた人形（ドール）の型はあまり巷で見かけたことのないタイプのものだった。
もっとも、あたしはそれほど人形（ドール）の世界に詳しくないけれど。
１０代の少女のボディ、スラリとしている割に、頬には弾力が感じられ、その製作にはかなりの金がかかっていることが窺えた。
なにがどう不自然なのかあたしはまじまじと、その人形（ドール）を見やる。
そして、分かった。その人形（ドール）が浮かべている笑顔は人間が浮かべるものとしてあまりに自然で、それゆえに人形（ドール）が浮かべるものとしては不自然極まりなかったのだ。

ショーウィンドウの前で一人難しい顔をしていると、変わらず笑

顔を続ける人形(ドール)たちの中で、その人形(ドール)だけがあたしに向かって、まるで昔のアイドルみたいにひらひらと手を振ってきた。挑発するかのようなその行為になぜか無性にムカつきを覚える。
それで――つけなくてもいい踏ん切りがついたというか、あたしは衝動に身を任せて、一生開けることはないだろうと思っていた人形(ドール)屋(ショップ)の扉を開け、その人形(ドール)を即金で買っていた。

まったく自分で自分が信じられない。

※

業者に頼めば運搬してくれたらしいけれど、見知らぬ他人に自分の住所を教えたくはない――
そんなつまらない意地を張ったことを後悔しながら、人形(ドール)の入ったボックスを手に歩くこと数十分。後悔が最高潮に達した頃にあたしはようやく部屋にたどり着いた。

部屋の適当な場所にボックスを置くと、これでもかというほどわかりやすい位置にある開閉ボタンを押す。
わずかな駆動音。ボックスがゆっくり開く。
ボックスの中で眠りにつく人形(ドール)の姿はショーウィンドウに飾られていた時と何ら変わりのない姿だ。
ボックスが完全に開くと同時に起動キーが入るようになっていたのか、眠っていた人形(ドール)が静かに目覚める。
そして、あたしと視線が合うと、ショーウィンドウで見た笑顔そのままに、その人形(ドール)は微笑を浮かべた。

「起動ナンバーの登録をお願いします」

「ドールのフリはしなくていいよ」
「起動ナンバーの登録をお願いします」
人形（ドール）は無表情であたしの言葉を無視すると、もう一度そう繰り返した。
面倒くさい。あたしは、腰に挟んでいたハンドガンを構えるとドールの額に狙いを定めた。
「見て分かると思うけど、一瞬で頭吹き飛ぶよ」
人形（ドール）は慌てることなく向けられている銃口を凝視する。この時点で、普通の人形（ドール）じゃないことが分かる。
「あちゃー、壊し屋さんでしたか。これはまた難儀な職業の人に買われちゃいましたね、私」
人形（ドール）は本当にまいったなーと言うように頭に手をやった。
「あたしの職業よく分かったね」
「そんな大仰な銃を持ってる人間なんて、壊し屋さん以外に考えられませんからね」
確かにそうだ。こんなものを持ち歩く者といえば壊し屋しかいない。
「でも、普通のドールにそんな判別はできないはずだけど？」
「確かにそうかもしれませんね」
「あんた、いったい何者？」
「んー、そうですね。知識が豊富な天才ドールってことで納得していただけますか？」

笑顔を微妙に崩し――そうするとさらに人間くさくなる――ドールは言った。

「無理だね」

あたしは、銃口を向けたまま言う。人形（ドール）が肩を竦める。

「それではどうしたら納得してくれますか？」

「あんたが何者かちゃんと話せば納得するかもよ」

あたしの言葉に人形（ドール）は小さく嘆息した。

どこからどこまで人間に似せて作られているんだか。呆れてしまう。

「そうですねぇ、簡単にいうと私は違法廃棄ロボットですかね」

日常では滅多に聞くことのない、あたしら壊し屋にとっては聞き慣れた単語を人形（ドール）はさらっと口にした。

「実は私、ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてしまいまして、そのまま廃棄処分になるところを自力で脱走したんです。その後はまさに波乱万丈でしたよ。まぁ、なんだかんだめげずに色々な困難を乗り越えてきた結果、今は生命の危機に立たされていますね」

「ある目的とかある事件ってのはなに？」

「それは、言えません」

「……じゃぁ、あのショップでドールになりすましてたワケは？」

あたしは他の質問をぶつけてみる。

「なにはなくとも住人ＩＤがなくては身動きが取りにくいですからね。買われた先のマスターを殺して住人ＩＤを奪おうかと考えていました」

あっさりと言う。つまり、あたしを殺そうと考えてたわけか。

あっけらかんとした態度にムッとしたが、それで分かったこともある。

【人間には逆らわない、殺さない、傷つけない】
【主人（マスター）の意思には逆らわない】
【自ら消滅しない】

ロボットがロボットたる3原則。けれど、このドールにはそのプログラムが組み込まれていない。つまり、その気になれば、こいつは人間を殺すことが出来るってわけだ。

一体、どんな目的で作られたのか気になったが、どうせ口を割らないだろう。

「そろそろ撃っていい？」

「ダメですよー。大体、私を壊してもスクラップリストには登録されてないんですから、あなたにはなんのメリットもありませんよ」

「あんたに殺されなくなるってのがあたしのメリットだと思うけど」

「そのことならご安心ください」

言うと、人形（ドール）はいやに親しげな笑顔を造った。

「あなたを殺すのはやめました」

「はぁ！？」

「だって、この状態から攻撃しても、私のほうが完璧に分が悪いですし、それにあなたみたいなクレイジーな人間に興味が出てきました。このままあなたの所有物になってしばらく様子を見ることにします」

突然の申し出にこちらが状況を理解する間も置かず、人形（ドール）はあたしの手を友好の証とでもいうように握った。

そして、思い出したように「そうそう、私にはパルシアルという立派な名前がありますのであんたというのはやめてくださいね」と言った。

2

あたしの毎日は単調な繰り返しだった。朝、目を覚ますとスクラップリストをチェックしに壊し屋ギルドに向かい、昼は適当に食事を取り、夕方になるとリストの中から選んだ違法廃棄ロボットを探しに行く。

壊し屋の報酬は、普通の職業よりも高い。だから、そう毎日仕事をする必要も本当はなかったのだけれど、あたしは毎日変わらず仕事をしていた。

仕事をして帰ってくる頃には、ぐったりしてなにも考えずに眠ることができたからだ。

あたしは今まで、できるだけ意識してなにも考えないように過ごしていた。

そして、これからもずっとそうしていくつもりだった。

なのに、パルシアルの存在は、あたしが今まで築き上げてきた、そんなささやかな日常性を揺らがせはじめていた。

「ウーノさんに質問です」

「……なに？」

「このロボットはどうして人を殺すのでしょうか？」

パルシアルは、あたしの前に置かれた資料を手にとって言う。この間、ケイちゃんにもらったものだ。

資料を読んだ時、あたしはその予想外の内容に愕然とした。彼女からは、単にロボットの捜索としか聞いていなかったからだ。

それは完璧にあたしの思い込みだったようで、捜索は捜索でもそのロボットの前には「殺人」という物騒なおまけがついていた。

殺人ロボットの捜索なんて聞いていたら、あたしは絶対に資料を

受け取らなかっただろう。
ケイちゃんにというよりも、いつもの簡単な仕事だと勝手に思い込んでいた自身の馬鹿さ加減にムカついた。
しかし、引き受けてしまった以上はどうしようもないので、あたしは、渋々、その殺人ロボットの情報集めに乗り出したわけだ。
「ロボットのことなんてわかるかよ。単にそういうプログラミングされてるだけでしょ。っつーか、お前だって人殺せるくせに」
殺人ロボットを製作したＡｍｏｋという研究所はもう潰れてしまい、上手いこと情報が集まらなくなっている。
時間だけが無駄に過ぎていく、その苛立ちもあって、ついきつい言葉で返してしまったあたしを、パルシアルがしょんぼりとした目で見つめていた。
言い過ぎたことに気づく。こいつに八つ当たりするなんて最悪だ。

「パル……」
「ウーノさん」
「は？」

咄嗟に謝ろうとしたあたしより先に、パルシアルが口を開く。

「お前というのはやめてくださいね。私にはパルシアルという立派な名前があるんですから」
「そっちかよ」
「はい？　なにがですか？」
「なんでもない。つか、長すぎなんだよ、お前の名前」
「でも、これ以上ないくらいいい名前でしょ？」
「パルでいいだろ、パルで」

「……ずるはダメです」

パルシアルはきっぱりと言う。

あたしは深く嘆息した。こいつと話していると疲れる。

「ウーノさん」

「なんだよ？」

「もう１つ質問なんですけど、人が人を殺すのはなぜでしょう？」

「は？」

あたしがパルシアルを見ると、パルシアルはにっこりとした笑顔を口元に浮かべていた。胡散臭い笑顔だ。

「ロボットが人を殺すのはプログラムなんですよね。では、人が人を殺すのはどうしてでしょう？」

なおも質問を繰り返すパルシアル。

なにも知らないはずなのに嫌なところをついてくる。あたしはパルシアルから目を逸らす。

「……人間には感情があるからじゃないの」

「まったく無関係の人間を殺すときもそうなんですかねぇ」

パルシアルはあたしの心中を知ってか知らずかそう付け加えた。

これ以上、話をしたくなくて、あたしは乱暴に立ち上がる。

「どこに行くんですか？」

「警察署」

投げやり気味に返して玄関に向かうと、背後で小さな嘆息が聞こ

えた。
人が傍にいてもいなくても人と同じような行為をする。パルシアルには、あたしが及びもつかないような技術が搭載されているようだ。
本当に一体なんの目的で作られたことやら――
改めて彼女の胡散臭さを確認しながら、あたしは外に出た。
※
「あら、やっと来たわね」
あたしの姿を認めると、ケイちゃんは待っていたとでもいうように言った。
「どういう意味？」
「捜索の件、断りにきたんじゃないの」
意外そうにケイちゃんは言う。騙すような形で仕事を引き受けさせて少しは悪いと思っていたらしい。
「まさか。ちゃんと探してるよ。ただもうちょっと情報がないか聞きに来ただけ」
「へぇー。っていうか、なんでライフル持ってるの？」
「え？　あぁ、出かける時の単なる癖」
「危ないヤツね」

ケイちゃんは、そういって肩を揺らすと「少し待ってて」と席を立った。
しばらくして戻ってきた彼女の手にはＡ４サイズの茶色い紙封筒。

「最新情報」

ケイちゃんは、スッとそれを差し出す。
しかし、封筒の隅に微かに残っていた日付は、あたしがケイちゃんから依頼を受ける数日前になっている。どうやら情報を出し惜しみしてたらしい。

「最初からくれればいいのに」

受け取りながらケイちゃんを軽く睨む。
ケイちゃんは困ったように「引き受けるかどうか分かんなかったからさ」と目を逸らした。

「少しは信用してよね」

まぁ、警察にもいろいろと事情があるんだろうけど。あたしは苦笑しながら、封筒から資料をとりだして、一応の確認をする。
前回もらったものよりも詳細な情報。細かくは家に帰って見ればいい。あたしは、資料を封筒に戻し、バッグにしまう。

「ところでさー」
「ん？」
「あんた、壊し屋以外の仕事する気ない？」
「はぁ？　なにいきなり」

突然、ワケの分からないことを言いだしたケイちゃんに、思わず胡散臭げな視線を投げる。

「いや、今度さ、新部署が設立するんだけど、ちょっといろいろあって、銃器の扱いに長けてる人をスカウトしておいてくれって上から頼まれたのよ」

「へぇ〜、どんな仕事？」

「簡単に言うとＳＰみたいなもんかしら。ウーノなら銃器の扱いも慣れてるし、適任かなと思って。まぁ、毎回、命張ってる壊し屋よりは多少収入は落ちるかもしれないけど、少なくとも安全だし安定してるし、悪い話じゃないわよ」

安全、安定か。あたしはそんなもの望んじゃいない。

「悪いけどいいよ」

「やっぱり」

ケイちゃんは、あっさりとした声でいった。

「絶対、断わられるって思ってたのよね」

「なにそれ」

「なんかウーノってさ、死ぬために壊し屋やってるみたいなとこあるでしょ」

意識したわけではないが、ケイちゃんの言葉に目つきが悪くなるのが自覚できた。ライフルを無意識に握る。

「……どういう意味？」

「特別、お金に困ってるわけでもないのに、今回みたいな危ない仕事も引き受けるし、稼いだお金はほとんど使わないで死んだ妹さん

の口座に振り込んでるでしょ。ああ、これはまともに人生送るつもりないんだなって誰だって分かるわよ」
「……妹は死んだんじゃなくて行方不明なだけだよ」
「まあ、どっちでもいいけど。ウーノの人生設計にケチつける気なんてさらさらないし」
あたしの言葉にケイちゃんは、同情とも憐れみとれるなんとも形容しがたい表情をうかべた。

※

家につくと丁度、玄関から配達業者と思われる服装の男が数人でてくるところだった。
どういうことだ？
あたしは不審に思いながら、部屋に入る。瞬間「…なにこれ？」とぽかんと口を開けていた。家を出たときにはなかった大きなベッドが部屋の半分を占領していたのだ。
「あ、ウーノさんお帰りなさい」
隣の部屋にいたらしいパルシアルが、ひょっこりと顔を出す。
「なにこれ？」
あたしは、同じ疑問を繰り返した。パルシアルは大きな目をキラキラと輝かせて

「見ての通りベッドですよ。すごいでしょ」
「すごい？　あー、確かにすごいね。こんなおっきいベッドはじめてみたよ」
「でしょ。ふっかふっかの超高級ベッドなんですよ」
嫌味だったのに嬉しそうに頷くパルシアル。
「で、こんなもの誰が使うの？」
あたしが尋ねると、パルシアルは分かってるくせにというように笑い「もちろん、わたしですよ」と胸を張っった。
「あんたにはボックスがあるでしょ」
「あれ、狭いし固いし、おちおち寝てられなかったんですよね」
「スリープモードに入れば、んなもん関係ないでしょうが」
言外にロボットの癖にという含みを持たせながら言うと、パルシアルはチッチッチと指を横に振り「甘く見られては困りますね。私はスリープモードでもちゃんと体感機能が生きてるんですよ。これだから、情緒のない人は」と、やれやれと言う風に首を振った。
まったくこいつは人を苛つかせる天才だ。あたしは、内心を悟られないように、部屋の隅においやられているＰＣデスクに腰掛ける。
「情緒がなくてけっこう。っていうか、だいたいお前、そんな金どこに持ってたわけ？」
「ウーノさんの口座にありました」
「はぁ！？　お前、あたしの金勝手に使ったのかよ！」
「はい。ちょっとウーノさんの口座を調べてみたら使いもしないお

金がたくさんあったものですから。使ってもらえないお金ほど可哀相なものはないですよ。いつなにがある時代か分かんないですから使える時にしっかり使っておかないと――」

悪びれた様子のないパルシアルに、頭が痛くなる錯覚を覚えてため息をつく。こいつと暮らしだしてからこんなことばかりだ。

「なんだかお疲れのようですね。お風呂で背中でも流してあげましょうか」

「キショイこと言うな、アホ」

「心外ですね。ドールには標準的に搭載されているプログラムらしいですよ、このキショイこと」

「……あんたはドールじゃないでしょ」

「まぁ、そうですけど。ドールになりすます時に、一応の基本データはインストールしてあるんですよ。三原則は邪魔なんで省きましたけど」

「だから、お背中流しましょうか？　マスター」とパルシアルはお風呂場を指差してウィンクをした。こんな仕草一つとっても人間らしすぎて本当にムカつく。

あたしは、肩に掛けっぱなしにしていたライフルを構える。

「マジで壊すよ」

「そ、それは勘弁して欲しいですね」

パルシアルは、両手を上げて困ったように微苦笑をつくる。まったく、大した機能だ。これ以上、話をしていても疲れるだけだ。あたしはパルシアルを相手にするのをやめると、ライフルを下におろしＰＣの電源を入れた。

さっきもらった情報をまとめていこう。

「それ、新しい情報ですか？」
いつのまにか隣に立っていたパルシアルが、もらってきたばかりの資料を素早く手に取る。
「邪魔すんなよ」
「いいじゃないですか。私も協力しますよ」
「お前のいう協力ってのは邪魔するってことでしょ」
「あー、またお前って言いましたね。何度も言いますけど――」
「うっさいなー。それ、返せって」
あたしは、パルシアルの手から資料をもぎ取る。
「まだ見てないんですよー。横暴はんたーい」
ぶーぶーと文句を言うパルシアルを適当にあしらいながら、あたしは資料に目を通していく。
警察署でチラッと確認した時にも思ったが、予想以上に詳細な情報だ。これでどうして見つからないのかが分からない。
資料から読み取る限り、Ａｍｏｋが製作していたロボットは軍事用のものだったらしい。
しかし、なんらかのプログラム異常が発生し、ロボットはその場にいた研究所員を殺して脱走。なし崩し的にＡｍｏｋはそのまま消滅。
資料をパラパラとめくっていくと脱走したロボットの設計図があった。
一見、ドールとしても通じそうな１０代の少女型。見覚えのある型だ。いや、見覚えがあるどころか――

「なにか分かりましたか？」

パルシアルがあたしを覗き込むように言う。

あたしは資料を持ったまま、パルシアルの全身を眺めた。まったく同じタイプだ。

ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きてそのまま廃棄処分されるところを――

パルシアルの言葉が蘇る。

ある目的が軍事目的。事件とはプログラムの異常。なぜ、パルシアルがこれほどまでに人間に似せてつくられたかは、敵に怪しまれないようにするため。

そうだとしたら、全て辻褄が合うじゃないか。しかし、それならばなぜ――

「どうかしたんですか、ウーノさん」

あたしの態度に違和感を感じたのか、パルシアルが不思議そうに訊いてくる。

「顔色が悪いようですけど？」

なぜ、こいつはあたしを殺さないんだろう？

あたしは、無防備なパルシアルを蹴り飛ばし、傍らに置いていたライフルを素早く構えた。そんなあたしをパルシアルは尻餅をついたまま目を丸くして見つめてくる。本当に人間そのものの所作だ。

銃口を向けられているパルシアルがゆっくり立ち上がる。
軍事用に作られたボディにどの程度の能力があるのか想像もつかない。緊張に体が硬くなる。
しかし、パルシアルは呆れるほど暢気な声で「……いったいなぁ。そういう趣味があったんですか、ウーノさんは」とお尻をさすった。

油断させるための作戦だろうか。緊張を解くことなくパルシアルを睨みつける。
しかし、パルシアルの表情は一定したままだ。いつも通り人間臭い笑顔を浮かべている。
だが、その体はあたし同様に緊張しており、あたしからなにか仕掛けられたら、即座に対応できる状態にシフトしていることが見てわかった。
あたしは警戒態勢を崩さないように気をつけながら、パルシアルに資料を投げ渡す。バサリと音を立ててそれはパルシアルの足元に散らばった。

「それ、あんたでしょ」

足元の資料をパルシアルは無言で一瞥する。

「危うく騙されるところだったよ」
「……ウーノさん」

パルシアルが資料を踏みつけて、一歩足を踏み出す。
銃口は変わらず彼女の動力部を捉えているのにだ。そんなことはまったく意に介した風もなくパルシアルはあたしに近づいてくる。

「動くな！」

あたしは、牽制にパルシアルの足元めがけて発砲した。パルシアルの足が止まる。

「このロボットはどうして人を殺すんでしょう、だったっけ？　あんたの質問」

「あんたじゃなくて、パルシアルですよ」

「んなことはどうでもいいよ。で、その答えはなんだったの？　あんたが一番知ってるはずでしょ」

「プログラムだって、ウーノさんは言ったじゃないですか」

パルシアルが冷静に言う。

「あたしはあんたの口からホントの答えを聞きたいんだよ」

「じゃぁ、ウーノさんにも質問に答えて欲しいですね」

いやに意味ありげに微笑むパルシアルに鼓動が少し早まる。

「なに？」

「私がしたもう1つの質問ですよ。人はなぜ人を殺すんでしょうか？」

「……それは、感情があるからだって、言っただろ」

一度、言った嘘臭い言葉をあたしは口にする。パルシアルはあたしの答えに満足したように笑った。

「なるほど、感情ですか。それは、無差別テロという行為だったとしても当てはまりますかね」

瞬間、あたしの心臓は跳ね上がった。

なぜこのタイミングでそんな単語が出てくる。なにを知っているんだ、こいつは。全てを知っているというのだろうか。
あたしは、探るようにパルシアルを見る。
「失礼だと思ったんですけど、少し調べたんですよ、ウーノさんのこと」
あたしの不審の視線に気づいたのか、パルシアルが言う。
「な、なんで、そんなこと」
掠れた声で問うと、パルシアルは「ウーノさんに興味があったからです」と笑った。
「ウーノさん、2年前にテロで妹さんが行方不明になってますよね。遺体は発見されないまま公式に死亡通知が出されてました」
街の中央に建設されたセンチュリービル。オフィス、レストラン、ファッション関係のショップ、などをそなえた複合ビルで、いつも多くの人間がそこにいた。
街の中枢を担っていたそれが、テログループによって爆破され、何万人もの犠牲者を出したのは有名な話だ。
「テロを企てたリーダー格の人物はその直後に何者かに殺害されていますね。実行犯は行方不明ですがリーダー同様殺害されたと見られています。テログループは誰がリーダーを殺したのか疑心暗鬼になり今はもうちりぢり――これじゃぁ、憎しみにまかせて仇討ちもできませんね」
パルシアルの端的な話を聞いていると、それは本当にくだらない

ことだと実感できた。ずっとそうだとは思っていたけれど、これほどだとまでにくだらないことだったのだ。
パルシアルは全てを見透かした目であたしを見ている。
「……なにが言いたいの？」
「つまりですね、爆破テロを実行する人間は、どういう理由でそうしようと思うのかが知りたいんですよ」
パルシアルが一歩足を踏み出した。先程のように牽制をする余裕は今のあたしにはない。
「そうそう、今回のａｍｏｋ社製のロボットによる連続殺人なんですけどね。あれは、実は無差別に行われているわけじゃないんですよ」
こちらの返事も待たずにパルシアルは勝手に話しはじめた。
「ロボットは正確ですからね、誰か１人を殺すために無関係の人間を殺すようなことはしません」
「……じゃぁ、今まで殺された人間はどういう理由で殺されたんだよ？」
資料に載っていた被害者リストにはまったく関連性が見当たらなかった。話がそれたことで少しだけ落ち着きを取り戻してそう尋ねる。
「殺された人間は直接的にでも間接的にでもＡｍｏｋと必ず関わっているんですよ。出資者だったり、企業だったり……殺人ロボットのプログラムはＡｍｏｋのコンピュータに名前が載っている人間を殺すようになっています。つまり、プログラム通りというウーノさ

んの答えは正解だったわけです」

流暢に喋るパルシアルに呆気に取られながらも　「なに、他人事みたいに言ってんの」と毒づく。

しかし、パルシアルは「ウーノさんと違って他人事ですからね」とニッコリ笑った。

心臓を抉るようなその言葉にあたしは言葉に詰まる。

「言い忘れてましたけど、私はａｍｏｋ社の殺人ロボットではないですよ」

「え？」

「言ったじゃないですか。ある目的で造られたんですけど、ある事件が起きて、そのまま廃棄処分されるところだったって。私は、ウーノさんが追っている殺人ロボット、ＡＩって言うんですけどね、そいつのプロトタイプとして造られたんです。ＡＩが完成したら、一緒に仕事をするはずだったんですけど……ウーノさんもご存知の通り、ＡＩが研究所の人間を殺して脱走しちゃったもんですから、私は職を失って散々ですよ」

「……本当にあんたじゃないの？」

「ええ。私ではないですね。だから、いい加減にそれを下ろしてほしいんですけど」

パルシアルはあたしの手にあるライフルを指差す。

一瞬、迷ったもののパルシアルの体から警戒態勢が消えていることに気づいて、あたしは素直にそれをおろした。

パルシアルが満足げに笑む。

「で、さっきの質問に戻りますけど。人が人を殺す理由に感情とい

うものが存在するのは、なんとなくですが分かります。でも、無差別に人を殺す人はどういう理由でそうするんですか？」

「……さぁ」

「分かりませんか？」

念をおすようにパルシアルが言う。

分からない。

なぜなんて、今さら聞かれても分かるはずがない。いや、あの頃、聞かれたって分からないだろう。

項垂れながら首を振る。

「そうですか」

パルシアルは幻滅したようなため息を吐くと部屋を出て行った。

3

めまぐるしく飛び交う嘘、情報、犯罪。
あの頃の私は、この手で何でもできると思っていた。できないことなんて、なに一つないと思い込んでいた。
だけど、それは単なる思い違いで、それに気づかなかったあたしはバカみたいにくだらない過ちを犯した。

人口走路（オートロード）からおりると、途端に人の群れと行き当たる。
立ち並ぶ高層ビル。人工的に造形された直線の世界の象徴。排気ガスと雑踏の中で生まれる熱気、無機的な香りのない空間が大都会を巻き込んでいる。
あの日以来、来たことのない街の中心部。　あたしがいなくても、世界は動いている。
パルシアルがいなくなってから数日、あたしは久しぶりに外に出た。
目的なんてない。ただもう一度確認したかっただけだ。人が一人いなくなっても、世界は変わらず動くってことを。

※

目的のない数時間を過ごした後、あたしは思い立って警察署に行った。仕事を断るためだ。
信じてといった手前、なんの連絡もなしにロボットの捜索を打ち切ることは気が引けた。そこまで気が回るほどには、あたしの精神は落ち着いてきたんだろう。

大丈夫。あたしは、まだ大丈夫だ。

警察署の扉を開ける。瞬間、嫌な匂いがした。
硝煙と血の入り混じった独特の匂い。床には砕けたガラスが散らばっている。右奥の廊下から銃声。悲鳴。足音。そして、静寂。
異様な気配。何かが起こっている。確実になにかが起こっていた。

恐る恐る移動し、廊下の奥を窺う。視線の先には何体もの死体が転がっていた。

「っ！」

いったい、なにが起こったんだ？
あたしがここに入って来て銃声を聞いてから、まだものの数分もたっていない。危機感が聊か足りない警察とはいえ、これほどあっさりと殺されるものだろうか。
あたしは湧き上がってきた唾をゴクリと飲み込む。

この殺戮者は何者だ？

なるべく足音を立てないように気をつけながら、ゆっくり歩を進める。見知った空間がまるで始めてくる場所のように感じられた。
あたしはいつもライフルをかけている肩に手を伸ばし、今日は持ってきていなかったことを思い出した。手持ちの武器は腰に挟んだハンドガンだけだ。
爆発しそうな心臓を意識しながら、どうにか呼吸を落ち着かせようと努力する。
ケイちゃんは無事なんだろうか？　不意に思い出した。
彼女のいる場所は、署内の地下だ。殺戮者が地上からやってきた

のならまだ生き残っている可能性もある。

どうする？　逃げるか？

考えるより先にあたしはハンドガンを片手に走り出していた。

※

チカチカと点滅する照明。静かだ。死体もない。

壁にもたれかかるようにして様子を窺う。いつもケイちゃんが座っているはずのデスクは空いている。

なんだ、上手く逃げたのか――あたしがそう安堵の息を漏らした瞬間

「あれ？　ウーノ、そんなところでなにしてるの？」

反対側の通路から暢気な声がかけられた。

コーヒーカップを持ったケイちゃんが、軽い足取りであたしに近寄ってくる。上でなにが起こっているのか、まったく気づいていないようだ。

あたしは呆れて彼女を見ていたが、ふとその背後になにかが忍び寄っていることに気づいた。

「ケイちゃん！！　避けてっ！！！！！！」

ソレが明確な意志を持って動き出すと同時に、あたしは叫んでいた。

ケイちゃんが反応できるかどうかも考えずに、ソレに向かって引

き金を引く。
銃声と悲鳴と着弾音。それら全てが重なる。
油断していたのか着弾の衝撃でソレは後ろに吹っ飛び、床に激突すると動きを止めた。
横に飛んで銃弾を避けたケイちゃんは、たった今何が起こったのかいまだ分からないでいるのだろう。呆然とあたしを見ている。

「なにしてんの！　早くこっち来て！！」

あたしが怒鳴るように声をかけると、ようやくケイちゃんは我に返って立ち上がった。

「い、一体なんなのよ？　どういうこと？　なんなのあれは？」
「警察お待ちかねのロボットが到着したんだよ」
「え？」

軍事用に作られていたロボットは、警察に届けられるはずだった。

もしかしたら、この間、ケイちゃんが新しくつくられると言っていた部署に配属される予定だったのかもしれない。だとすれば、Ａｍｏｋのコンピュータにこの署の人間の情報が載っていてもおかしくない。
そして、その情報を元に、いとも簡単に殺人を犯す軍事用のロボットがここにやってきた。

真偽はともかくそれがあたしの出した結論。

「ともかく、ケイちゃんは逃げてよ」
「ウーノ、あんたはどうするの？」

ケイちゃんの戸惑いに満ちた声と、ソレが立ち上がるのは同時だった。
さっきの被弾で左肩が少し削れているが、たいしたダメージにはなっていないようだ。ゆっくりとこちらに向かってくる。

「ウーノ……早く逃げないと」

ケイちゃんが震えた声であたしの肘を引っ張る。
きっと逃げても無駄だ。
人を殺すために作られたソレは相手に逃げられたからといって追跡を途中でやめるほど甘くないだろう。一度、狙いをつけたなら、例え地の果てまでだって追いかけてくる――あれはそういう類のものだ。
そして、たったいまソレに攻撃を加えたあたしも攻撃対象に入ってしまったはずだ。ならば、戦うしかない。

「ケイちゃんだけ逃げて」
「でも」

ソレが攻撃態勢に入るのが分かった。

「ケイちゃんがいると邪魔なんだよ！！」

あたしはケイちゃんの手を振り払い、凄まじい速度でこちらに接近してくるソレに引き金を引く。ソレは、今度は吹き飛ばない。

銃声。銃声。銃声。

すぐ間近までソレが来る。

ヤバい！　――そう思った瞬間、世界が回転した。逆転する天地の中、なんとか受身を取る。すぐに次の攻撃に備えて身構える。が、ソレはあたしを攻撃した位置で止まっていた。

「……なんだ？」

不思議に思ってそこに目をやると、まだ逃げていないケイちゃんの姿が視界の先に映った。

「のバカッ！！」

舌打ちしながら、ソレの足元を狙って引き金を引く。
着弾。バランスを崩してソレが倒れる。
ケイちゃんは一瞬、あたしを見て、はじかれたように走り出した。

「ったく……さっさと逃げろよ。お前もそう思うだろ？」

ゆらりと立ち上がったソレに笑いかける。
ソレは、タイミングを見計らっているのか攻撃をしてくる気配はない。

３原則に当てはまらないロボット。人を殺すことが許されたロボット。
それは一体なんと呼ぶのが正しいのだろう。
改めて思ったのは、パルシアルのほうが会話が成り立つだけまだましだという、どうでもいいことだった。

あたしは、銃を握りなおす。
人間に似せられたボディに、凄まじい機動力、これで装甲がぶ厚

く出来ているということは、まず考えられない。
残弾数がどのくらいか覚えていないが、的を一つに絞って、確実に弾を撃ち込めばきっと破壊できるはずだ。

銃を構えると同時にソレの姿がぶれた。尋常でないスピード。
死神の鎌のようなブレードが光った。咄嗟に後ろに飛んで避ける。
鎌が左腕を掠める。信じられないほどの激痛が走った。飛び散る。赤。紅。朱。
歯を食いしばって、痛みを意識から排除する。
視界にソレがうつる。ソレはすぐに次の攻撃を加えようと足を一歩出し、体勢をくずす。先程の足元への攻撃が功を相したのかだろうか。ともかく、あたしにとってはその一瞬で十分だった。

一挙動でソレの動力部があるところに照準、発砲する。

5発目で装甲がはがれる。
ソレが動く時間を与えないように休むことなく引き金を引き続ける。
動力部が露になった。後一発で、破壊できる。あたしの勝ち。引き金を引く。

――カシッ。
勝ちを確信したあたしをあざ笑うように撃鉄が空の弾倉を叩く音が空間に響いた。

「マジかよ……」

弾切れ。最悪のタイミングだ。
ブレードが迫ってくる。ソレを蹴り飛ばした反動で横に転がる。
微かに腹部を掠めるブレード。血が宙を舞う。その痛みを感じる

まもなく、ソレの蹴りが的確にブレードを掠めた腹部へ飛んでくる。

再度回転する世界。

事務室のガラスを突き破って、あたしは吹き飛ばされる。

今度は、受身を取る暇もなかった。したたかに背中を打ちつける。

一瞬、呼吸が止まった。

全身が狂ったように酸素を求めているのに肺が痛くて息ができない。左腕の傷口からもドクドクと血が流れているのか生温い。

起き上がろうとすると涙が出そうなほどの痛みが全身に走った。

動くのは右腕だけ。武器はもう何一つない。

あたしはここで死ぬのか？

ぼんやりと思う。

※

「なんかウーノってさ、死ぬために壊し屋やってるみたいなとこあるでしょ」

ケイちゃんの声が遠く聞こえた。

死ぬため？

あたしが、死ぬために壊し屋をやっていたのなら、今の状況は願ったり叶ったりだろう。

でも、違う。そんなんじゃない。あたしが壊し屋になったのは死にたいからじゃない。

じゃぁ、なんのために？

「分かりませんか？」

パルシアルの声。

分からない。いや――分かっている。

カツンという音が聞こえた。床を踏む死神の足音。

あたしはゆっくり瞳を開ける。痛みでいつの間にか瞼を閉じていたらしい。ぼんやりとした視界が広がる。

少し離れた場所にソレは立っていた。

――あたしは、死にたいなんて言える立場じゃない

既に射程距離内だというのに、ソレはさらに近づいてくる。

――みっともないくらい無駄に生きて、苦しんでのた打ち回って、ゴミみたいに朽ちるのが一番似合ってる

あたしのすぐ近くまで来てソレは止まった。

――だってそうじゃんか。まったく関係ないたくさんの命を奪って、知らなかったからとはいえ、大切な人までその手にかけたんだから、それくらい苦しんでもまだ足りないだろっ！

ソレの顔にはじめて笑みが浮かぶ。作り物めいた笑顔。

あぁ、これはロボットだな。

あたしはぼんやりした頭で思った。

ソレが、ゆっくりブレードを振りかざす。不意に妹のことが脳裏をよぎった。

この期に及んで自分に都合のいい思い出に浸るほど、あたしは恥知らずではないし、妹に許しを乞えるほどまともな人生を選んでこなかった。

だから、これは在り来たりでくだらない感傷だろう。

無理矢理、妹のことを頭から追い出す。そうするとあたしの脳裏は空っぽになった。

これでいいんだろう。屑みたいなあたしはがらんどうのまま死ぬのが一番いい。

覚悟を決めてソレを見上げる。

ソレは無表情でブレードを振り下ろした。瞬間、パンと火薬がはぜる聞き慣れた音がした。

ソレがあたしに向かって崩れ落ちてくる。あたしは思わず右腕を動かして、ソレの下敷きになるのを防いでいた。

「あれれー？　まだ動けるじゃないですか」

あたしが右手で押さえていたソレを、ヒョイッと取り除くと、そいつは暢気な声で言った。

「……あんた、なんでここに？」

「あんたじゃなくて」

「……パルシアル」

この期に及んで、バカみたいなことにこだわるパルシアルに苦笑する。

「そう。やっぱりフルネームでよばれると嬉しいですねぇ」

パルシアルは満足そうに頷き、ソレをまるでゴミを扱うように手で掴むと放り投げた。

「……で、なんでここにいんの？」

「実は、ずっと秘密にしてたんですけど……ＡＩが脱走した後から、私は彼女を殺すために独自に捜索をしてたんです。そうしたら、たまたまウーノさんもＡＩを捜索してたので、これ幸いと思ってウーノさんの傍に」

「……じゃぁ、なんで家出て行ったんだよ？」

「それは……ウーノさんが１人になりたそうだったので、私なりに気を遣ってみたんですけど……なにか問題でもありましたか？」

「気を遣うって柄かよ」

「私は、ピースな愛のポジティブですからね。はい、起きあがれますか？」

パルシアルは意味の分からない言葉を言いながら、あたしに手を差し出す。

あたしは腹部を押さえながらパルシアルの手を握る。

立ち上がると血が足りないせいかくらくらした。体もズキズキと痛む。

「歩けますか？」

「……いや、無理っぽい」

「じゃぁ、おんぶしてあげます」

パルシアルはいきなり屈みこんだ。そのままの体勢で「どうぞ」とあたしを振り返る。

「はぁっ！？　いいよ、いらない。やっぱり歩く、歩ける」

「遠慮はなしですよ」

馬鹿だ、こいつは。まったく警戒のない背中に毒づく。

あたしが壊し屋で自分は違法廃棄ロボットだと言う立場を忘れているんだろうか。

今、この瞬間、あたしに壊されても文句は言えないのに。っていうか、こいつだって元々はあたしを殺す気だったんだから、今が絶好の機会なんだけどな。

――ホントに馬鹿なヤツだ。

「早くしてくださいよ」

パルシアルの声にあたしは一つ嘆息して、その背中に体を預けた。

パルシアルはあたしに振動を伝えないように気をつけているのか、ゆっくりと歩き出す。

歩きながら「救急車が来るまであと１０分程ですよ」とパルシアルが口にした。別にどうでもいい。

外は薄暗くなっていた。凍えた灰色の雲が、街をすっぽりと包み込み、いまにも雨が降りだしそうだった。

まだ救急車は来ておらず、パルシアルはあたしをおぶったまま「退屈ですね～」と空を見上げた。

あたしはゆっくり口を開く。

「――誕生日だったんだ」

「はい？」

「妹が死んだ日はあたしの誕生日だったんだよ」

パルシアルはあたしを気にするようにチラリと首を回したが、すぐにそれを戻した。あたしは気にせずに話を続ける。

「妹は彼氏の家に行くって言って出かけて、それでそのまま帰ってこなかった。でも、ホントはあたしの誕生日プレゼントを買うために、センチュリービルに行ってたらしくてさ」

氷の粒が紛れ込んでいるような冷たい風が頬を撫でる。泣きたくはならなかった。

「その日のあたしは、自分のしてきたことで馬鹿みたいに頭一杯だったから……いつも暗くなる前には帰ってくるあの子が帰ってこなくても、そう気にしてなかったんだ。それより、いつ事件のことが流れるかってずっとＴＶに釘付けでさ。速報で事件のことが報道されて、ガッツポーズなんかしちゃって。乾杯しようと思って冷蔵庫開けたら、その中に手作りのバースデー・ケーキが入ってたんだ。その時になって、あたしははじめてその日が自分の誕生日だってことに気づいたんだ」

気づいた時には、もうあたしの誕生日を祝ってくれる人間はいなくなってたけど。

「ホントどうしようもないバカだよね」

情けない笑いが喉の奥から漏れる。

今まで誰にも言わなかったこと。かといって、忘れることもできなかった。忘れられるはずがなかった。

この世界でたった一人の大切な人を殺しておいて、それを忘れてのうのうと生きるなんて、できるはずがなかった。

だから、せめて苦しもうと思った。苦しんで苦しんでその果てに地獄に堕ちればいいのだと。

それはあまりにも自己本位な考えだけれども――

あたしが話し終わるのを待っていたかのように、冷たいモノが頬に当たった。雨が降り始めたようだ。

曇った天を仰いで雨粒を顔で受け止める。

この雨がなにもかもを流してくれるなどとは思わない。ただ、なんとなくそうしたかった。

「ウーノさん」

不意にパルシアルがあたしを呼んだ。

「……ん？」

「これからは、私のことパルって呼んでもいいですよ」

「ズルはなしじゃなかったの？」

「特別です」

パルシアル、いや、パルが微かに笑う。

その振動が傷口に響いて痛かったけれど、不思議と気にならなかった。遠くでサイレンの音が聞こえていた。

1

いつもは穏やかな私の工房では、先程から熱い口論が繰り広げられている。それも私の目の前で。

口論はマスターである金髪の少女が、人形（ドール）の体感機能のレベルを下げて欲しい、と私に注文したことに起因している。

それはかなり珍しい注文だった。逆の注文なら多数あったけれど。

人形（ドール）はそのことを全く聞かされていなかったらしく、血相を変えて抗議をはじめた。

それから１０分。何度も同じやり取りが繰り返されている。

「絶対に、嫌ですからね！　私のお買い物よりも無駄なお金の使い方ですよ、それは」

「ガタガタ言わないでしてもらえって。ただでさえ、お前は普通と違うんだから」

「そりゃぁ、私はそこらのおバカな人形（ドール）たちと違って完璧ですけど……ともかく今のままでいいです。お布団は、ふっかふかなのが当たり前なんです！」

「あ、おい！！　ちょっと待てって！！」

主の制止の声も聞かずに少女人形（ドール）は店を出て行った。

命令に忠実なのが売りの人形（ドール）にしては、およそらしくない行動。

私の良く知る彼女の姿に重なる。

彼女以外にもあんな人形（ドール）が存在していたのかと、私はなぜか少しホッとしていた。

「……ったく、逃げ足だけは速いんだから」

ドアの上で揺れている鈴を睨みながら、少女が苛立たしげに床を蹴る。その拍子に肩に掛けていたライフルがズルリと落っこちた。少女が慌ててそれを引き上げる。

流れるようなコミカルな動きに、笑っていいものかどうか逡巡していると、少女が「すみませんねぇ、あいつ、我侭で」と、私の方を振り返って申し訳なさそうに頭を下げた。そこでまたライフルがずり落ちる。わざとしていえるのかと思わせるほどのタイミングだ。

吹き出しそうになるのをこらえながら私は「いえ、大丈夫ですよ。主と人形（マスター　ドール）が喧嘩できるなんていい関係じゃないですか」と言った。本心だった。

私の言葉に少女は「いい関係ねぇ……」と呟き苦笑を浮かべる。

「まぁ、いいや。今度は、あいつをちゃんと説得してから来ることにするよ」

「お待ちしています」

私が頭を下げると少女も軽く会釈をし、そのまま小走りで工房からでていった。なんのかんの口では言っていても先に飛び出していった人形（ドール）のことを気にしているらしい。やはりいい関係だと思う。

2人が出て行ったドアを一時見つめる。それから、たまっている仕事にとりかかることにした。

私の仕事は、擬似恋愛用のために創られた人形（ドール）のカスタマイズをすることだ。

元々、人形（ドール）にはそれ相応の基礎プログラムが備え付けられている。だけど、より自分の嗜好に合った人形（ドール）を求める利用者は多い。

当然といえば当然のことだ。彼らは自分の思い通りになる人形が欲しいのだから。

ただのロボットのメンテナンスと違って、人形（ドール）のカスタマイズを生業とするカスタマーは――主に人形（ドール）の性的な部分を弄る為、より高度の技術が必要とされ――まだまだ需要のそれには追いついていない状況だ。おかげさまで私の商売はけっこう繁盛している。

人形（ドール）の普及に伴ってできた職業の中で、カスタマーは壊し屋についで高給取りといえるだろう。

別にそのことに誇りを持っているわけじゃないけど――むしろ、逆だ――暮らしが楽なのは結構なことだと思う。

独立してから衣・食・住に困ったことはないし、自分の趣味に取れる時間も僅かながらある。私は今の生活にかなり満足している。

今の生活、彼女との二人暮らしに――

2

「マーサ、そろそろ起きなよ」

朝、私のベッドを占領している彼女にそう声をかける。

「ん……かおりさんも一緒に寝ましょう」

彼女は寝ぼけ眼のままバカなことを言って、少しだけ横にずれた。そうすると、彼女の隣に1人分のスペースが空く。

「ほら」

パンパンと空いたところを手で叩きながら、子供のような瞳で私を見つめてくる。

仕方なく、私は彼女の隣に身を滑り込ませた。

「かおりさん、体冷たい」

彼女は私の背中に腕を回し「仕事しすぎ」と咎めるように言った。

「仕事じゃないよ」

「……じゃぁ、なに？」

「マーサに友達作ってあげてたの」

言うと、彼女は不満そうに眉間に皺を寄せて、私から体を離した。喜んでくれると思っていただけに少し意外だ。

私がその態度に戸惑っていると「どういうこと？」と彼女が問う

てきた。

「私が仕事でいない時、暇だ暇だって言ってたでしょう？　だから、仕事で余ったパーツかき集めて、一から人形（ドール）をつくってみたのよ」

「……ふーん」

彼女は気のない返事をすると、ベッドから体を起こし、そのまま部屋を出て行ってしまった。

その後姿を見送って、私は落胆の溜息をついた。

一体、なにが気に喰わなかったのだろう？　いつまでたっても気まぐれな彼女の行動は私には理解できない。

ふと先日の主（マスター）と人形（ドール）の喧嘩のことを思い出す。

マーサも言いたいことがあるのなら、あの人形（ドール）のように遠慮なく言ってくれればいいのに。それとも、どれだけ長く一緒に暮らしても、元々の主（マスター）じゃない私が相手では無理なのだろうか――考えて、私はベッドに体を横たえたまま疲れた双眸を閉じた。

マーサは、私が仕事と関係なく接した初めての人形（ドール）だ。

その頃、カスタマーとしてまだまだ駆け出しだった私の一日は、カスタマイズに必要なパーツをスクラップ置き場から拾ってくることからはじまっていた。

丁度、人形（ドール）が大流行した時期で、それと同時にスクラップ置き場には人形（ドール）の残骸が捨てられるようになっていたからだ。

その日も、そうだった。

いつものようにスクラップ置き場にいって――そして、私は彼女を見つけた。

元々の主（マスター）の趣味なのか、少し下品に感じられる金色の髪に大きな二重の瞳がとても印象的だった。
スクラップ置き場には、彼女のように壊れてもいないのに捨てられる人形（ドール）はたくさんいた。
それなのに――どうしてだか分からない。彼女と目があった瞬間に家へ連れて帰られなければいけないような気がした。

今、思えばそれは一目惚れだったのかもしれない。
なぜなら、その時の私は彼女が男性型（メールタイプ）として、つくられた人形（ドール）だと勘違いしていたのだから。
もちろん、家に連れ帰って体のメンテナンスを始めた時に、その人形（ドール）が彼ではなく彼女であることが分かったのだけれど。

メンテナンスを終えると、ぐったりしていた彼女はすぐに元気になった。
ただ結構な人見知りなのか、なかなか私に打ち解けようとはしてくれなかった。
それは人形（ドール）の性質としてどうなのかな、とも思ったが、私は私で人見知りする性質なので上手く彼女と接することが出来ず、暫くの間、私たちはぎくしゃくしたまま日々を過ごすことになった。
そんなある日のことだ。

「か、かおりさん」

彼女が不意に私の名前を呼んだ。
私は驚いて返事も返せず、彼女をただバカみたいに見つめてしまった。
たかだかそれくらいのことで、と思われるかもしれないけれど――その時まで彼女は私のことを一応、主（マスター）と呼んでいたのだ。

ただ私は、彼女の本来の主（マスター）ではないから、彼女からそう呼ばれることに少し抵抗があった。
そのことを彼女にも何度か伝えたことがある。それでも彼女は、頑ななまでに私のことを主（マスター）と呼ぶのをやめなかった。
だというのに、その日、急に――

あまりの驚きに固まっていると「な、名前違いましたっけ？」と、彼女は不安そうな声でいった。私は慌てて首を振った。

「よかった。記憶領域が壊れてるのかと思いました」

彼女はそういってホッとしたように笑った。
それが随分と彼女の印象を変える笑顔で、私はまたバカみたいに口を開けなければならなかった。

結局、なにがきっかけで、彼女が私のことを主（マスター）と呼ばなくなったのかは、今だに分からない。
単純に私が主（マスター）に値しなかっただけなのかもしれないけれど――あの頃から彼女は気まぐれなのだ。
私は深く嘆息し重い体を起こす。寝不足のせいで少しだけクラクラした。だけど、そうもいってられない。機嫌を損ねた彼女がそろそろ物にやつあたりしはじめてもいい頃だ。
ボサボサになった髪を撫でつけて、私は隣の部屋に向かった。

3

私が部屋に入ると、彼女は白いソファの上にあぐらをかいて座っていた。
なんの感情も見せない無表情。端整な顔立ちのせいで、そうするとひどく冷たい印象を与える。

「マーサ？」

呼びかけると、彼女はふいっとわざとらしく私がいる方とは反対側に顔を向けた。まるで子供だ。
さて、どうやって不機嫌な彼女をなだめようか？
気づかれないように息をつき彼女の隣に座る。と、彼女は体ごと私に背を向けた。

「ねぇ、なにをそんなに怒ってるの？」

理由が分からなければどうしようもない。私は仕方なくそう切り出した。

「分かんないんですか？」

言外にそれくらい分かって当たり前だという響きが含まれている。だけど、分からないものは分からない。

「……ゴメン、分かんない」

私が言うと、彼女はようやくこちらに向き直った。先程と違ってどこか悲しげな眼差し。

「かおりさん、新しい人形（ドール）つくったんでしょ？」
「うん。初めてにしては上出来っていうか会心の作なんだよ、これが」
重たい空気に耐えかねて冗談めかしてそう言うと、彼女はますますその瞳を曇らせた。
「かおりさんは、あたしのこと嫌になった？」
「え？」
「だって……その新しい子にあたしの代わりさせるんでしょ？」
言われて、はっとした。彼女は一度捨てられている。そのことを思い出した。
機械（ロボット）だって捨てられれば傷つく。傷つかないわけがないじゃないか。特に人形（ドール）のように人間に似せてつくられているのなら、なおさら。
主（マスター）に捨てられるということが、彼女たちにとってどれほど深い傷になるのか、私には想像もつかないけれど。
人間が新しい人形（ドール）を家に連れてくるということ＝自分が捨てられるということ。彼女がそう考えてもおかしくはないのに――私はあまりにも軽率すぎた。
「ご、ごめんなさい、マーサ。そういうつもりじゃないのよ」
私は優しく彼女の両頬を手で挟みこむ。
彼女は泣くのをこらえるかのように口をきゅっと一文字に結んでいた。
「ホントにマーサに友達をつくってあげたかっただけで……ゴメン

ね、不安にさせて。ゴメン」
「……ホントに？」
「うん」
「絶対？」
「うん」

頷くと、彼女はホッとしたように口元を綻ばせ私に抱きついてきた。

「マ、マーサ？」
「ねぇ」
「な、なに？」
「かおりさんの一番はあたしですか？」

耳元で囁かれる。彼女の問いに私は顔が赤くなるのを感じた。
子供っぽくてホントは小心者のくせにこんなとこだけ気障に決めてくれる。一体、どんなプログラミングをしたらこんな人形（ドール）ができるんだか。
私は、半ば呆れながら――しかし、彼女がこういうことを口にできるような関係も、傍から見たらいい関係になるのかなと思った。
あの時の少女の苦笑の意味がなんとなく分かったような気がする。
あの2人が主（マスター）と人形（ドール）という、ただ一方通行の主従関係ではないように、私たちもそうなのだろう。
だから、きっとマーサは私のことをもう二度と主（マスター）とは呼ばないはずだ。

なぜなら、私たちの関係は――

「ねぇ、かおりさん、答えは？」

催促の声に、私は確かな意志を持って頷いた。

1

その人形（ドール）は特別製ということもあって、人形屋（ドールショップ）で売られているどことなく顔つきが似通った人形（ドール）達とはまるっきり違って見えた。

「あと数分もしたら目を覚ますと思うんだけど」

この人形（ドール）の製作者であり、ドールカスタマーであり、あたしの遠い親戚でもあるかおりさんは、そう言うと時間を確認するように腕時計に視線を落とす。

そして、申し訳なさそうな顔になった。

「ごめんね、今日はちょっと時間がなくて、起動まで見てあげられないんだ」

「ううん、無理言って来てもらったの、あたしの方だし」

かおりさんは、この間、腕利きのカスタマーとしてなにかの雑誌に載ってから、ドールカスタムの予約が、じゃんじゃんきて、てんやわんやしているらしい。

そんな状況なのに、あたしのことを優先して来てくれたのだ。感謝こそすれ、謝ってもらうようなことじゃない。

「ほら、かおりさんはもう行って。あたしは本当に大丈夫。これでも一応、小さい頃からかおりさんが仕事してるところずっと見てきたんだから」

まだ申し訳なさそうな顔してるかおりさんにそう言うと、彼女は少し思案してから「もし、なにか不具合があったらすぐに私のところに連絡して」と、連絡先の書いた番号をベッドの脇の机に置いた。

「それじゃ、元気でね」
「うん、かおりさんも。あんまり根つめて仕事しないようにね」
あたしの言葉に、かおりさんは微苦笑を浮かべ頷くと、あたしを強く抱きしめて、部屋を出て行った。
おざなりにかおりさんを見送ると、あたしはまだ眠っている人形（ドール）を見つめる。
もともと、この人形（ドール）は、かおりさんと一緒に暮らしている人形（ドール）が、かおりさんが仕事をしている間、寂しくないようにと、友達用プログラムを組んで制作したものらしい。
だけど、結局、理由あって、人形（ドール）は当初の目的で使われることなく、かおりさんの家の倉庫に眠ることになったという。

その時のあたしは、まさに悲劇の主人公になったばかりで、病院の一室に閉じ込められていた。
入院している間、あたしはいろいろな人形（ドール）を見た。
それらは全て、もう手の施しようがない死を待つだけの患者に与えられる看取り用の人形（ドール）だった。
病院側はその看取り用人形（ドール）をつけて、あたしの精神の安定をはかろうとしたようだけれど、それらはあたしの性分にはまったく合わなかった。
プログラム通りの甲斐甲斐しさ。優しい言葉。
そんなの反吐が出る。そんなものに看取られるくらいなら、一人で死んだほうがマシだった。

病院から、あたしのそんな話を聞きつけたかおりさんは、お見舞いがてらに彼女を連れてきてくれた。「この子は一味違うよ」と言って。

彼女は目がちょっと離れていて、彫像のようなやけに存在感ある鼻をしてて、パーツパーツだけとってみるとひどくアンバランスなのに、全てのパーツが合わさるとなぜだかとてもキレイだった。
あたしを看取るのはこの人形(ドール)だ、ピンと来た。
そこでかおりさんに無理を言って、彼女のプログラムを組み変えてもらうように頼んでみたのだ。
かおりさんは、最初、あたしの申し出に戸惑っていたけれど、さすがに死期の近い人間の頼みを断れなかったのだろう。意外にあっさりと了承してくれた。
かおりさんが、彼女のプログラムを調整している間に、あたしの病気は「やっぱり最期はお家で暮らしたいですよね？」レベルまで進行していた。

キュィーンと機械の駆動音が聞こえた。ようやく彼女のお目覚めだ。
あたしは彼女を覗き込む。睫が少し震えて、ゆっくりとその瞳が開いた。灰色に近い黒。
パチパチと目を慣らすように2、3回瞬きを繰り返したあと、彼女はあたしを見た。
ドキドキしながら彼女の言葉を待つ。こんな気持ちは久しぶりだ。
彼女の唇が微かに動く。よく聞こえない。　あたしは、その口元に耳を寄せた。

「・・・・・・むぁ」
「へ？」

意味不明。
顔を離して彼女を窺い見ると、彼女はにっこりと笑った。
つられて笑ってみると、彼女は「あはっ」とさらに相好を崩して、

あたしに飛びついてきた。

「うわっ！！」

「びっくりした？」

「う、うん」

こんなに子供っぽいなんて思ってなかった。

「名前どうする？」

「名前って？」

「ユウナはユウナでしょ。あたしは？」

彼女はあたしを指差し、それから自分を指差した。

あたしの名前は、もう彼女の記憶領域の中に入っているらしい。

「えっと……」

名前のことなんてちっとも考えていなかった。

「は～や～く～」と彼女がじたばた暴れる。まるで地団駄を踏む子供だ。大人っぽい外見とは大違い。

あたしは、ほんのちょっとだけ、この人形（ドール）を看取り用に選んでよかったのかな、と後悔の念を抱いた。

やがて、彼女は暴れすぎてバランスを崩し、あたしが手を伸ばすよりも先に、後ろに倒れてごつんと頭を打った。

「むぅ」

顔を顰めて唸る彼女を見て、ふっと名前を思いつく。

「ムーッ！」

「むぁ？」
「ムー、今日からあなたのことはムーって呼ぶ！！」
「ムー？」
「そう、ムー！！」
「むぁっ！！」

名前が気に入ったのかなんなのか、やっぱり彼女は意味の分からない言葉を発して、あたしに抱きついた。

あたしは、今日からムーと暮らす。
最期の日がくるその時まで。

2

「誰、これ？」

突然、お見舞いに来てくれた同じ施設育ちの彼女はムーを見るなり、憮然とした表情になってそう言った。

彼女は人形（ドール）の存在をあまり快く思っていない。昔、人形（ドール）といろいろあったのだと聞いたことがあった。詳しくは教えてくれなかったし、聞いてもないけど。

それを知っているから、あたしはムーが人形（ドール）であるということを彼女には隠そうと思っていた。

それなのに――

「ユウナを看取る会、会長のムーだよ」

「……つまり、看取り用のドールってこと？」

「正解っ！！」

あっさりばれた。

「ユウナ……」

彼女は複雑な表情であたしの名を呼んだ。

「人形（ドール）なんかに頼るのは……むぐっ」

言いかけた言葉は急に口元に伸びてきたムーの手によって止められた。

「……っにすんのよ！！」

彼女が乱暴にその手を払いムーを睨みつける。ムーは無表情のまま。

一触即発、竜虎相まみえる、ええっと桃栗三年柿八年、これは関係ない――ともかくとってもヤバい雰囲気だ。

二人ともきっとあたしが超がつくほどの重病人だってことを忘れている。

「あなたが人形（ドール）嫌いなのは分かったけど」

険悪な空気をどうにかしようとあたしが必死に頭をひねっていると、ムーが不意に口を開いた。

「ユウナにひどいことを言う権利はないと思うんだ」

「はぁ！？　私がいつそんなこと言った？」

「今、言おうとしたじゃん」

ムーは無表情のまま。こんな顔は見たことがない。

あたしの知ってるムーは、いっつも馬鹿みたいに笑ってたから。

なにを言ってもなにをしても、むぁむぁ言ってへらへらへらへら。

でも、今はそうじゃない。もしかしたら、怒っているのかもしれない。

ムーは人形（ドール）だけど、かおりさん特製の人形（ドール）だから、そんなこともあるのかもしれない。

あたしが横目でムーを盗み見ていると、それに気づいたのかふっとムーの顔が和らいだ。

そして、ムーは急に彼女の方に歩み寄り「というわけで、今度か

ら来るときは連絡してから来てよ」と、彼女の肩をポンと叩いた。
「へ？」
突然、態度を翻された彼女は当たり前だけど戸惑っているみたいだ。無論、あたしも戸惑っている。
「あなたが来る日は、あたしはちょっくら山へ芝刈りとか、川に洗濯にでも行ってるからさ。それでいいでしょ？」
冗談とも本気ともつかないような口調でムーは言う。
「そんなわけだから、あたしは出かけてきますかねぇ」
「……今日はもういいよ」
「むぁ？」
「もう帰るから」
玄関に向かおうとしたムーを手で制して、彼女が呟く。
ムーは肩を竦めて私を見た。その間にも、彼女はさっさと玄関の方へ向かってしまう。
「……ユウナ」
ドアの前で彼女はピタリと足を止めた。
「え、なに？」
「……後悔しない？」
彼女があたしを振り返る。

後悔？

どういう意味なのか分からず答えあぐねていると、ムーの腕があたしの肩を包んだ。

それを見て彼女は今日はじめて笑顔を見せ――それは少し複雑そうな笑顔だったけど「ならいいや」と手を振って、あたしの家を出ていった。

3

朝、目が覚めると、炊き立てのご飯とお味噌汁の匂い。ムーはとても料理が上手だ。
朝食の準備ができると彼女は部屋に飛び込んできて、あたしを優しく起こしてくれる。

「ユウナ、今日の調子はどう？」
「いいよ」
「むぁ！　じゃぁ、いただきます、できるね」
「うん」

毎朝、恒例のやり取り。　調子がよくない日は、本当に残念だけど食欲がまったくなくて、彼女が、折角、作ってくれた料理が食べられなかったりする。最近は、そんな日が多くて憂鬱だ。
でも――今日は本当に気分がいい。

「いっただっきまーす！！」

ご飯を食べるあたしを見て、嬉しそうにムーが笑ってて。だから、こんな日はとても大切だと思える。

朝食が終わるとすることはいろいろ。
一緒にゲームしたり、一緒にお買い物したり、一緒にお掃除したり、一緒に夜ご飯作ったり――大事に大事に壊れ物を扱うかのようにあたしに接してくる病院とは違って、ムーはあたしの調子をきちんと考えながらも、無理をしなくてすむ範囲でいろいろなことを一緒にしてくれる。あたしは、それがとても嬉しかった。

「皿洗い！　皿洗い！！」

スポンジに洗剤をたっぷり垂らして、ぎゅっぎゅっと握ると泡がほわほわ出てくる。

ムーはその泡を見るのが好きで、食事の後片付けになると、いつもこんな風に楽しそうにはしゃぐ。

「好きだね、ムー」

ムーの洗ったお皿を、あたしは隣で受け取って拭く。

あたしの言葉にムーは「泡楽しいじゃん、ふわふわ」と、指についた泡をあたしに向けて、ふぅっと飛ばしてきた。

泡は、あたしに当たってパチンとはじける。まるであたしの命みたいに儚い。

もう諦めているけれど、こんな風に呆気なくはじけちゃうのは少し怖いな、ふとそんな感傷に襲われる。

「ユウナ」

不意にムーが妙に真面目な顔になってあたしを呼んだ。

「なに？」

返事と同時に、ムーはあたしに向けて、また泡をふぅっと飛ばしてきた。

さっきより多目の泡は、やはりあたしに当たるとはじける。

「キレイだよねぇ」

「え？」
「なんにでも終わりがあるからキレイに輝くんだよ」
ポカンとムーを見ていると、彼女は優しい笑顔であたしをぎゅっと抱きしめた。
「あたし、ユウナの輝きを最期までちゃーんと見守ってあげるからね」
「ムー……」
――後悔しない？
今、誰かにそう問われたら、あたしはすぐに頷くだろう。
もし、明日、死んでしまっても、あたしはムーとの暮らしを後悔しない。
あたしより背の高いムーの胸の中から見上げる。
「いいこと言うと思ったでしょ？」
ムーが子供っぽく、むぁっと口を開けた。
その視線は、まっすぐにあたしを見つめていて。
例え、それが巧妙なプログラムだったとしても、なんだか照れくさくて嬉しくて
「ぜんっぜん」
「むぁ？」
あたしは、その気持ちを誤魔化すために彼女から離れた。

「ほら、ムーが濡れた手で触るから、あたしの服まで濡れちゃったじゃん」
「おぉっ！　ホントだ」
ムーは、こいつぁ大変だとばかりに大げさに両手を挙げた。
その弾みでムーの手に残っていた泡がまた宙に飛んだ。それはキラキラしていて確かに綺麗だった。
あたしは、これからもこうして彼女と一緒に暮らす。暮らしていく。
後悔しない最期の日を迎えるために――

1

今日も私はスクラップ置き場に行く。
そこには色々な物が惜しげもなく捨てられている。それらの中には、まだまだ使えるものもたくさんあって、リサイクルショップに持っていけば、少しはお金になるんだ。

ぐしゃぐしゃに潰された鉄くずの塊を掘り起こしていくと、皮膚がはがれて内部の様子が薄っすらのぞいている壊れた人形（ドール）が出てきた。
人形（ドール）は発掘しても売れないから見つけても意味がない。
まぁ、売ろうと思えば売れるけど――壊し屋たちと争ってまで売る価値がないのは確かだ。
がっかりしながら、それを蹴り飛ばした瞬間

「こんにちは、アサノさん」

後ろからそんな声がかけられた。
振り返らなくても、こんなところで私に親しげに声をかけてくる奴は一人しかいない。

「また来たんだ」

少しうんざりした振りをしながら振り返る。
彼女は初めて会った時と同じように、フェンスの上に腰掛けていた。

「ほら、私って暇人ですから」

私が言おうと思った言葉を彼女は先に口にし、してやったりという風に笑った。
毎回毎回、彼女が来るたびに私がそう言うから先手をとったんだろう。

「アサノさん、こっちに来て休憩でも取ったらどうですか？」

彼女はそう言うと、バッグからジュースを取り出して、私に投げてきた。
私は慌ててそれをキャッチする。彼女はにっこり笑って手招きをした。
毎度のことながら有無を言わせない強引さだな、と感心しながら、私は彼女の座るフェンスに飛び乗った。

彼女がここに来るようになったのは3ヶ月ほど前。
ふらりと現れて、今みたいにフェンスの上からジャンク漁りをする私たちを見下ろしていた。
彼女の服はいつも卸したてのようにキレイで、ジャンク漁りなんかする必要がないくらい、その暮らしぶりが裕福だということが窺えた。
だから、彼女が一体なにを目的としてここに来たのか、顔見知りの仲間達ももちろん、私も不思議に思い、そして僅かな苛立ちを覚えた。
彼女から無言で眺められていると、まるで馬鹿にされているような気がしたのだ。
けれど、所詮は金持ちの道楽。すぐに飽きて来なくなるだろう。
そう思い、私たちは彼女の存在を全力で無視することにした。

ところが、彼女は毎週のようにやってきては、じっと私たちを見下ろすのだ。

しばらくすると、あまりの居心地の悪さに耐え切れなくなったのか、彼女の目の届かないスクラップ置き場へ移動する子がぽつりぽつりでてきた。
私はというと、ここで皆と同じように場所を変えてしまうのは無性に癪に障ったし、それではなんだか彼女に負けてしまったような気がしたので、ついには私と彼女以外、誰もいなくなってしまっても意地でもその場から離れなかった。

スクラップ置き場に一人残ってしまった私に、彼女は、漸くフェンスから降りてきて、遠慮がちに声をかけてきた。
それはすごくマヌケで、彼女が、なぜ、私たちを興味深げに見ていたのかを、一言で理解するには十分な問いかけだった。

「ここでは、どういうお仕事が行われているんですか？」

そう、彼女は私たちがなにをしているのか、まるっきり分かっていなかったのだ。
分かっていないのだから馬鹿にしようもない。それを馬鹿にされていると感じたのは、私たちがこの仕事に誇りを持っていなかったからだろう。
勝手に卑屈になっていたことに気づいた私は、思わずその問いに苦笑してしまった。
それからというもの、彼女はチョコチョコとやってきては、私に話しかけてくるようになった。

「パルシアルって変な奴だよね」

彼女からもらったジュースを一口、口に含み言うと「そうですか？」と彼女は心外だというように首を振った。

「変だよ」
「それは自覚したほうがいいくらいの変さでしょうか？」
「うん、自覚したほうがいいよ」

私の言葉に彼女は納得いったのかいってないのかどちらとも取れる表情のまま　「ふぅむ」と唸った。
まったくもって変な奴だ。
彼女は誰でも知っているようなことをまるっきり知らない世間知らずの癖に、かといえば急に小難しいことを私に問いかけてきたりと、本当に掴めない性格をしている。

「あの人形（ドール）は売れないんですか？」

不意に彼女はさっき私が掘り起こした人形（ドール）を指差した。

「うん、人形（ドール）は売れないんだよ」
「どうしてですか？」
「人形（ドール）は違法廃棄されてる確率のほうが高いもん。そういうのは、壊し屋さんのお仕事になるの」

私の言葉に彼女は微かに皮肉っぽい笑みを浮かべた。
だけど、それはほんの一瞬で「人形（ドール）はどれくらい捨てられてるんですかねぇ？」と、すぐにいつもの顔に戻ってそう言った。

どれくらい？

毎月のように新作がでる人形（ドール）。
そのたびに買い換える裕福な馬鹿もいるらしいから、それこそ数限りなく無限にといっても過言じゃないと思う。
そう答えると、彼女は「それではなんのために人形（ドール）は生きてるん

でしょうね」と、先程の人形（ドール）を見ながら呟いた。
その呟きにギョッとして私は思わず彼女を見やった。
なんでかって？　――人形（ドール）が生きているなんて考えを持つのは人形（ドール）愛護団体ぐらいしかいないからだ。
自分たちが人形（ドール）を救うと豪語しているあの糞くだらない偽善者集団。
彼らがどれだけ喚いたところで、違法に廃棄される人形（ドール）は減るどころか増えるばかりなのに、その現実には目を瞑り、一体の人形（ドール）を救えば全ての人形（ドール）を救った気になっているおめでたい連中。私のもっとも嫌いなタイプの人間たち。彼女もその中の一人なのかと思ったのだ。
しかし、彼女の表情からは、なにも窺い知ることはできない。
朽ちた人形（ドール）を見つめる瞳だって、あの団体特有の熱病みたいなものじゃない。
「……人形（ドール）は所詮ロボットだよ。生きるも死ぬもない。あるのは壊れる、だけ」
わざとそう言ってみた。誰かにそう言われると、連中は絶対必死になって反論するんだ。
そういう考えがこんな可哀相な人形（ドール）を作り出すんですよ。見てください、まるで親に捨てられた子供みたいじゃありませんか――
大の大人が顔真っ赤にして両手振り回して、馬鹿馬鹿しい。
親に捨てられた子供は人形（ドール）とは全く違う。どうにかして生きる努力をするんだよ。例え赤ん坊だって、自分がここにいることを知らせるために大声で泣くじゃないか。

人形（ドール）にはそんなプログラム組まれてないから、捨てられたらそのまんま。ただスクラップにされるだけ。
私は鉄くずの中に転がっている無残な人形（ドール）に視線を移した。
「人形（ドール）はロボットだよ」
反応がないのでもう一度そう繰り返すと「まぁ、そうですよね」と、彼女はひどく穏やかな声で肯定した。
予想外の声色に彼女を見やる。そこにある彼女の表情にはなにもなかった。どんな心も存在していないかのようで妙にゾッとした。
「でも、ロボットにも感情が生まれることがあるかもしれませんよ」
私の視線に気づいたのか、彼女はふっと表情をつくって――そう、私には、その時の彼女の笑顔は作り物のように見えた――言った。
「中には、どうして自分が生まれたのか考えすぎて壊れてしまったロボットもいるかもしれません」
「なにそれ？」
「例えばの話です」
彼女は妙に威圧感のある笑みを貼り付けたまま、反論を待つようにチラリと私を見た。
私はジュースの缶を口に運んでから「……仮にそんなこと思ったロボットがいてもさぁ、人間でも分かんない答えを誰が答えられるのさ」と、少し強めに言った。
どうして自分が生まれてきたかなんて誰が答えられる？　居もしない神が答えてくれるとでも？

私の言葉に彼女は感心したような溜息を漏らした。

「それもそうですよねぇ。盲点でした」

さすがアサノさん、と彼女はあっさり納得して頷く。そこには、いつものほわんとした笑顔。なんだか肩透かしを食らった気分だ。

「……やっぱりパルシアルって変」

残ったジュースを一気に飲み干すと、私はフェンスから飛び降りた。

そろそろ仕事を再開しないと、今日は収穫ゼロになってしまう。

「休憩はこれまでね」

彼女に断って、私はスクラップの山に足を踏み入れる。

「また来ますね」

そういう彼女の声が聞こえて、私は片手をあげてそれに答えた。

少し離れたところに私が掘り起こした人形（ドール）がある。

先程は気がつかなかったけど、ガラス球の目は開けられたまま、空を見ているようだった。私はその瞼に軽く手のひらを乗せて瞳を閉じさせる。

ユウナが死んだら、あのバカっぽい看取り用のドールは同じことをするのかな？

ふとそんなことを思って、馬鹿馬鹿しくなった私は声を出さずに笑った。

さっさと売れるものを探して、目がちかちかするどピンクの電飾看板がかけられたあのリサイクルショップへ行こう。

1

私の名前はリカ。リサイクルショップの雇われ店員。簡単に言うとバイトだ。

しかし、バイトのままで終わるつもりは、さらさらない。いずれはこの店を我が手中に収めてみせる。それだけじゃない。さらにはエリア拡大もはかろうと考えている。この店は私の手で世界のリサイクルショップになるのだ。

果てしない野望のための第一歩は店長の抹殺からだ。実際に抹殺するんじゃなくて社会的に？　そんな感じにアバウトに。

「それでね……聞いてる？　リカちゃん」

いつのまにか目の前に店長がいた。

この人、まだ話していたのか。

商品を陳列しに行く振りをしながら、少し離れる。

「聞いてますよ。っていうか、もっと簡潔に話してくれませんか？」

「簡潔に？」

「そう、まだオチまで言ってませんよね」

私が出勤したのが１０時。現在は１０時３０分。

店長は、私が制服に着替えてから――といっても、エプロンをつけるだけなんだけど――ずっと話し続けている。その間、開店準備はまったくしていない。口だけ動かして手は動かさず。いつものことだから、と仕方なく開店準備をはじめた次第だ。

とはいえ、開店時間は１１時だ。私たちに残された時間はあと３０分しかない。

いくら私が開店準備の天才だとしても、いい加減店長にも動いてもらわないときびしいものがあった。
そろそろ店長の息の根を……もとい、口を止めよう。
私が止めなければ、店長は残りの３０分も口だけを動かすだけだろうし、なによりこれ以上、彼女の長無駄話を聞き続けるのは精神衛生上悪い。

「なにが言いたいのか、そろそろはっきり言ってください」
「うん。だからね、うちの買い取り価格ってそんなに安いのかなぁって」

店長は眉毛を八の字にして言った。
もしも、私が男なら胸キュン物だったかもしれないが、生憎と私は超がつくほどの美少女だ。店長のそんなぶりっ子仕草には飛び蹴りをくらわしたくなる。それに――

「……それだけですか？」
「うん、それだけだよ。どう思う？」

それだけのことを、どうして一言で済ますことができないのだろう。

おはよう、リカちゃん。ちょっと聞いてくれる？　大問題が勃発したの。それで相談に乗ってほしいんだけど……一から説明していくから、ちゃんと聞いててよ（略）そうそう、いつものジャンク漁りの女の子がぶぅぶぅ文句言ってくるんだよねぇ。その子さぁ、私のことキショイとか言うし。ちょっとひどいよね。それでね、リカちゃん云々云々。

まだ耳に残っている愚痴というかなんというか。結局、この３０

分間、こいつはまったく関係ないことを話していたんじゃないか。

「……あの、店長」

「なに？」

「そんなこと３０秒もあれば楽に言えますよね」

「うん」

「あなた、３０分も話してたんですよ」

「え、うそ？　あれ、ヤダ、ホントだぁ」

時計を見てキショイ声とくねくねした動き。

いまさら気づいたらしい。ムカムカ。

「つまり、２９分３０秒も時間無駄にしてますよね」

ムカムカ。

「関係ある話だから無駄じゃないでしょ」

店長はキョトンと首を傾げる。

無駄です。あなたの言葉の全てが無駄なんです。　あなたの口から紡がれる全ての音が無駄なんです。言い換えるならば、あなたのそんざ――さすがにそれは言いすぎだな　。

私は言いたい言葉をぐっとこらえて　「……もういいです」と、会話の拒絶を示すように手を上げた。大人な対応ってやつだ。後世の店長たるもの、それぐらいできなければ、この街の人間相手に商売なんてできないのだ。

「それで、どう思う？」

「なにがですか？」
「だから、買い取り価格の話」
もぅ、しっかりしてよね、と店長は頬を膨らませる。その頬を両の人差し指でぶしゃっと凹ませたいものだ。
「さぁ？」
「さぁってリカちゃんも少しは考えてよ」
「だって、私はそんなこと言われたことありませんから」
「そうなの？」
「ええ」
「そうなんだぁ。なんでだろ？　なんで私の時だけ文句が出るのかなぁ？」
店長は少し考えるように口元に手をやった。
事実だった。店長の話にでてきたジャンク漁りの子の応対を何度かしたことあるが、私の出した買い取り値にケチがついたことはない。
とどのつまり、店長はその子に舐められているだけなのだろう。どう見ても舐められそうなキャラと声だし。私はチラリと店長を見る。
彼女は、私の視線に気づいたのか　「じゃぁこのままで大丈夫だね」と笑った。そして、こう続ける。
「さ、無駄話は終わりにして開店準備するよ」
さっきから私はしている。
思わず、陳列したばかりの電子レンジを彼女に向かって投げつけたい衝動にかられた。そんなことはしないけれど。
店長如き取るに足らない人物のために私の輝かしい未来を棒に振

るつもりはない。この店が手に入るまではおとなしくしといてあげよう。

さぁ気を取り直して開店準備。開店準……はて、これはなんだ？

つい手に取ってしまったのは陳列待ちの商品の中にある物体。

「て、店長、これって売り物なんですか？」

「んー？　あっ！それウィンドウに飾ったらいいと思わない？」

「……え？　これをですか？」

「絶対にいいと思って昨日、買いつけてきたの」

店長は自信満々に言う。私は、自分の手元にあるものを改めて見直した。

どどめ色の奇妙奇天烈な、というか、かなりグロテスクな感じのする置物。こんなものを店の鏡ともいわれる重要なポジションに置いて客が減らないだろうか。いや、減る。考えるまでもなく、絶対に減る。

店長の案は、審議の結果、棄却されました。彼女にばれないように、私はその置物を棚の下に無理やり押し込んで、二度と人目に触れられないようにした。

これでよし、と私が勝利のステップを踏んでいると入り口の自動ドアが開く音がした。

見ると、今時ちょっと見られないようなおかっぱ頭の女の子が立っていた。

「すみません、まだ開店時間じゃないんですけど」

店長がすかさずその子に声をかける。

店長が対応するなら私は行かなくてもいいだろう。二人の話に聞き耳を立てながらも、私は開店準備を続ける。

「あ、いえ……あの買い物に来たわけじゃなくて」

「はい？」

「私、人を探してるんです。この人なんですけど、知りませんか？」

ポゥッと立体写真の映像が出る音がした。

「……あ」

なにかに気づいたような店長の声。

「知ってるんですか？」

「知ってるっていうか……ねぇ、リカちゃん」

店長が私を呼ぶ。

私がいないとあの人はなにもできないらしい。全くもって困ったちゃんだ。

商品を並べる手を止めて二人のいるほうへ向かう。

「なんですか？」

「ほら、この子」

店長は手にした立体写真を私に向ける。

「あぁ」

差し出された写真に映っていたのは、よくこの店に来る壊し屋さ

んに最近くっついて行動している少女の顔と同じものだった。

「知ってるんですか？」

「知ってますよ。この方がどうかしたんですか？」

事件の匂い。そんなわけない。

「あの、これを彼女に渡してほしいんです」

女の子はガサガサと音を立てて、ウェストバッグから一枚のディスクを取り出した。

「はい？」

「お願いします」

女の子が頭を下げる。

「構いませんよ」

「ダメです！」

店長と私の声が重なった。

「ふぇ？」

女の子は私と店長を交互に見比べる。　店長は驚いた視線を私に投げかけている。

「ちょっとリカちゃん、どうしてそう意地悪なこと言うの？　ディスク渡すぐらいいいじゃない」

「ダメですね」

私は店長にむかってきっぱりと言ってから、女の子に向き直る。
「私たちは慈善事業やってるわけじゃないんですよ。ただでそんなことはしません」
そうピッと指を立ててみせると、ぽかんと口を開けていた女の子は私の言葉を理解したのか「じゃ、じゃぁ……これ、ください」と、すぐ近くの棚から目覚まし時計を持ってきた。
「毎度ありぃ！！」
私は彼女からディスクとお金を受け取った。
店長が信じられないといったような顔でこちらを見ていたが気にしない。商売とはこうやるのだ。

※

「それじゃぁ、よろしくお願いします」
女の子は、ペコリと頭を下げると店を出て行った。
その姿を見送っていると、後ろから妙な視線を感じる。振り返ると店長と目が合った。
「……リカちゃんって顔に似合わず、がめついよね」
呆れた声で言う。

「がめついわけじゃないですよ。これは商売の基本です。店長が甘すぎるんです」

私は受け取ったメモリを胸ポケットにしまいながらそう返す。

「そうかなぁ」

店長は、首を捻った。

「そうですよ」

少しの沈黙。　店長が気を取り直したかのように「……でも、なんだろうね、そのディスク」と言った。

「さぁ、なんでしょうね」

「見ちゃおっか」

好奇心丸出しの声。言うと思った。

「ダメです！！」

「え、なんでよ？」

「私は、お客様との信頼関係を大事にしてますからね。そういう信頼を裏切る行為はしません」

「ケチ」

ふてくされた子供のように店長が口を尖らせる。

あなたは何歳ですかぁあああ！！！　と、耳元で叫びたくなった。

「ともかく、これは私が保管しておきますからね」

「はいはい」

店長は諦めたように肩をすくめた。

時刻は１０時５０分。

「そろそろ開店ですね！　店長、さっさとそこのゴミ掃いといてください」

「……私、店長なんだけどなぁ」

ぶつくさ文句を言いながらも、店長は渋々モップを手にとる。

「私は外の電飾つけてきますから」

危うくのっとり作戦がばれそうになったので私は外に避難した。

店の電飾看板。Ｒ＆ａｍｐ；Ｒという文字が輝いている。しかし、まだ以前の名残で、そのライトは店長好みのどピンクのままだ。

この色、神経がどうかしてるとしか思えない。近いうちにこんな目に悪い色は変えよう。

自分の考えに、うんうんと頷いていると

「ちょっとリカちゃん！！」

店内から私を呼ぶキンキン声。

やれやれホントにいい年して困ったちゃんだ。私は大きく伸びをして入り口のドアをくぐった。

そこには、私が棚に捻じ込んだはずのグロテスクな物体を持ち、物凄い形相で仁王立ちしている店長がいた。

「リカちゃん、説明、してくれるよね？」

額に筋をいくつもたてながら店長がにっこりと笑う。ぞくぞくっと背筋に悪寒が走った。

私はこの店の店長になる前に天国に行くかもしれない。本気でそんな気がした。

1

「……大丈夫かなぁ？」

今しがた出てきたリサイクルショップの方から、ガラスの割れる音が聞こえて、カナエは不安げに呟いた。

やはり、他人に頼まないで直接渡すべきだったろうか？

いや――カナエは微かに首を振り、バッグにしまった立体写真を取り出す。

直接会わないで渡してほしいというのが彼女の頼みだった。だから、これでいいのだろう。

※

私が彼女を拾ったのは、この街で何年か振りの台風が襲来した翌日のことだった。

アパートの共同カーポートに置いておいたスクーターがずっと気になっていた私は――そのスクーターは誰が見ても旧式のタイプで、大した価値はないのだけれど、私にとっては、はじめてのお給料で買った大切なものだ――まだ誰一人として起きていないだろう早朝に外に出た。

外に出ると、まだ台風の残した雲が弱い雨を降らせていた。
濡れるのも構わず小走りで階段を駆け下りる。

「……うわ」

下りてすぐに見える共同倉庫の惨状に思わず声が出た。
風で右へ左へ転がされたのだろう、使い物にならないくらいボコボコだ。見ていると不安が募ってくる。
カーポートは大丈夫だろうか？
私は逸る気持ちを押さえながら、アパートの裏側にあるカーポートに向かった。

すぐに目に入ってくるのは倒れた自転車たち。そして、大きなワゴン車。私のスクーターはその影に置いてある。せめて風よけになればと思って台風が来る前に移動させておいたのだ。
自転車みたいに倒れているだけならいいけど――そう願いながら恐る恐る覗きこんでみる。
奇跡が起きていた。私のおんぼろスクーターは、まるでなにごともなかったように立っていたのだ。台風が来る前とまったく同じ状態。
よかった。ホッとしながらスクーターに駆け寄ろうとして――

「あっ！」

私はあるものに気がついた。
人だ。私のスクーターのすぐ傍らに人が倒れている。しかも、ピクリとも動かない。
もしかして、死んでいるのかもしれない。

「ど、どうしよ……」

キョロキョロと辺りを見回す。
私が殺したわけじゃないんだから、人目を気にする必要はないんだけど。その前に、死んでるかどうかも分からないってば。落ち着け、私。

深呼吸。なんとなく抜き足差し足の要領で近づく。
しゃがみこんで顔を確認する。女の子だ。髪は乱れていて顔にたくさん泥がついている――だけど、とても綺麗な子だった。

「……あのぉ？」

声をかけてみる。と、すぐにその子は目を開けた。大きな瞳がじっと私を見つめてくる。

「……う、動けますか？」

問うと彼女は小さく首を振った。

なんてこったい！　どこか怪我でもしているのかもしれない。

私は慎重に彼女の体に腕を回して抱き起こす。

「大丈……って血ぃっ！？」

うつ伏せになっていたから気がつかなかったけれど、よく見ると彼女の体にはかなりの量の血がこびりついていた。
なんだか物凄くヤバい人なのかもしれない。

「い、一体なにがあったんですか？」

「……」

彼女は無言で首を振る。

「誰にこんなこと？」

「……」

彼女は無言で首を振る。

「どうしてこんなところで？」

「……」

「家はどこなんですか？」

「……」

矢継ぎ早の私の質問に彼女は全て首を振る形で答える。

このままじゃ埒が明かない。

「……警察呼んだほうがいいのかな」

思わずそう呟いてしまった。

途端、彼女が激しく首を振り、私の腕から逃げるようにふらふらと立ち上がる。どう見ても行く宛があるようには思えない。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

私が彼女を呼び止めるのと、彼女が倒れこむのはほとんど同時だった。

2

彼女を助けた理由なんて特にない。
あんな状況でほっとく人間なんてきっといない。だって、寝覚めが悪くなるもん。

※

彼女をソファに寝かせて、体を拭くためのタオルと着替えの服を用意していると背後で物音がした。どうやら気がついたらしい。
とりあえず、タオルだけを持って彼女の傍に行く。

「起きました？」

問うと、彼女は不安げに私を見上げてくる。

「大丈夫ですよ、警察には連絡してませんから」

きっとそれが気になっているんだろうと思ってそう言うと、案の定、彼女は私の言葉にホッとしたような顔をした。

「それじゃ、これで体を拭いて、こっちの服に着替えちゃってください。そのままじゃ、風邪引いちゃいますからね」

私がタオルと服を差し出すと彼女は素直にそれを受け取る。その手にも血がこびりついていた。

包帯と消毒液も用意したほうがよさそうだ。そう思って、私は立ち上がる。瞬間、彼女が私の肘をつかんだ。

「……ん？」

振り返ると、彼女の口がなにか言いたげにパクパクと動いている。でも、そこから音がでることはなかった。

思い返してみると、彼女は一度も声を発していない。もしかして――

「……喋れないんですか？」

問うと、彼女は頷いた。

頭の中の『今から用意するものリスト』に紙とペンも付け加えることになった。

包帯と消毒液、紙とペン、あとは温かい飲み物。それらを用意して、彼女がいる部屋に戻る。

彼女は、私に言われたとおり服を着替えていた。

「うわぁ、綺麗になりましたねぇ」

持ってきたものをテーブルの上に置きながら声をかけると、彼女は不思議そうに首を傾げた。

なにかおかしなことを言ったかな？　頭をかきながら、私は彼女が脱いだばかりの衣類に目を落とす。

「あ」

着替えよりなにより、一番にしなければいけないのは怪我の治療

じゃないか。彼女が全く痛がる素振りを見せないのですっかり忘れていた。
慌てて彼女の体を抱えおこし、ソファの背もたれに寄りかからせる。まだ不安が残っているのか彼女の視線が揺れた。
「ちょっと怪我の具合見るだけだから、大丈夫ですよ」
安心させようと声をかけると彼女はプルプルと首を振る。
なにが言いたいんだろう？
分からなくて、私はテーブルに置いていた紙とペンを彼女に渡した。
彼女はペンをとって短く――『怪我、ない』と、書いた。
「でも……」
私は思わず足元にある血のついた衣類に目をやる。
遠慮しているのだろうか。この期に及んでそんなものは無用なのに。
「いいから、見せてくださいって」
少し強めに言うと、彼女は眉根を寄せて溜息をつき、今しがた着たばかりの服をバッと脱ぎはじめた。上も下も。
「うわっ、わわっ！？」
突然の行動に私はつい目をそらしてしまった。
同性なんだけど、そこまで堂々とされると、それはそれでなんだ

か恥ずかしい。

「し、し、下は脱がなくても」

動揺しまくりの私の言葉に応えるように物を書くペン音が聞こえた。

横目でその様子を伺う。視界の端に彼女の白い肌がチラチラ入って顔が赤くなる。

なに考えてるんだ、私は。ぶんぶんと首を降っていると、書き終わったのか彼女が紙を私に向かって突き出してきた。

『私、ロボット。怪我ない。大丈夫』

紙にはそんなことが書かれていた。

「ふぇ？」

驚いて彼女を見る。

彼女の腹部。白い肌にぱっくり開いた傷口。

けれど、その奥は真っ黒で人間のものではなかった。よくよく見ると、細かな機械がある。

私はマジマジと彼女の全身を見る。これだけ精巧なロボットは、ドールでも見たことがない。傷口がなければ、どこからどう見ても人間だ。それ故に

「……い、痛くないの？」

私はとんでもなく間抜けな質問をしていた。

彼女が微かに笑って頷く。

「で、でも……お腹開きっ放しは、さすがにまずいんじゃないかな？」

その問いに彼女は首を傾げる。

「た、多分、まずいと思うよ」

とは言うものの、どうしたいいのかは分からない。

当たり前だ、ドールの知識なんて全くといっていいほど皆無なんだから。かといって、ワケあり感満載の彼女を修理センターにつれていくのは無理だろう。

「と、とりあえず、テープで塞いでおこっか」

はっきり言って、そんなことしていいのか分からなかったけれど、彼女がコクリと頷いたので、そうすることにした。

私と彼女はそれから一週間を共に暮らした。

彼女は、産まれたての赤ん坊のように、なにも知らなくて――コンロの火の付け方ですら――私は彼女になにか聞かれるたびに、いつも不思議に思っていた。この子は、どういう扱いをされてきたのだろう？　と。

はじめは、その容姿から彼女のことを、持ち主の趣味嗜好を満たすためにフルカスタマイズされたオーダーメイドのドールだと思っていたけれど、基本的にドールには、人間の世界の一般常識がプログラムに組み込まれているはずだ。

中にはわざと頭の悪い女の子に仕立て上げられる場合もあるけれど、知っていることを知らないものとして振舞うドールのようなわ

ざとらしさを彼女からまったく感じられなかった。
いつだって彼女は人間のように自然だった。その感情表現さえも。
だから、あの傷口を見ていなければ、私は彼女のことをいつまでも人間だと思っていたことだろう。

彼女のその傷口はたったの3日でふさがった。
正直、テープは荒療治すぎたかなと不安に思っていただけに安心した。
彼女は『テープが効いたね』と、嬉しそうに紙に書いていた。

その日から、私と彼女は同じベッドに寝るようになった。
それまでは、寝ぼけて彼女の傷口を蹴っちゃわないかと心配だったので、私はソファで寝ていたのだ。
彼女は『人がこんなに傍にいるのははじめて』と少し緊張したような表情を浮かべていたけれど、それはお互いさまだった。
私だって誰かと一緒に眠ることは、はじめてだったから、もしかしたら、彼女よりももっと緊張していたかもしれない。

彼女の名前を知ったのは、彼女がいなくなる前日のことだ。
信じられないことに、私たちはその日までお互いの名前を知らずにいた。
名前を知らなくても、彼女との生活は上手く回っていたし、いつも彼女が紙に何か書いて私がそれに答えていたから、その必要があまりなかったのだ。

でも、その日は違っていた。

彼女は何か言いたげにチラチラと私を見てはくるのだけれど、その手に握られたペンは、なかなか動かない。
その時になって、ようやく私は彼女に呼びかける言葉を持ってい

ないことに気づいた。

「……あの」

出窓からぼんやり外を眺めている彼女の背中に声をかける。

ん？　という風に彼女が振り返る。カーテンの隙間から零れ落ちる光の欠片が彼女を照らして、やけに綺麗だった。

私が彼女に対してそう思ったのは、倒れている彼女を拾った時とこの時だけ。妙にドギマギしてしまう。

その動揺を悟られないように「私、あなたの名前知らないなぁって思って」と言った。

彼女は鳩が豆鉄砲を喰らったみたいな顔をして、それから、私の顔を指差した。

私？　――なんのことか考え、私の名前のことだと思い当たる。

「私は、カナエだよ、カナエ」

私の答えをなぞるように彼女の口が動く。

カ・ナ・エ。音は出ないけれど、彼女の視線と唇の動きは、確かにそう言っていた。

それから紙を持った手が動き出す。

「ん？」

『私、しなきゃいけないことがあるの』

「……うん」

『もしかしたら、それは悪いことなのかもしれないけど……私のこと忘れないでいてくれる？』

文字は彼女の気持ちに呼応するかのように微かに震えていた。

最初の一文から、彼女がもうすぐいなくなってしまうことに気づいてしまった私は「……当たり前じゃん」と返した。
私の答えに彼女は泣き出しそうな顔で笑った。

その晩、私と彼女は夜更けまでいろいろなことを話して――筆談だけど――手を繋いで一緒に眠った。
次の日、私が目覚めると、一通の手紙と一枚のディスク、そして、立体写真が机の上に置いてあった。

※

懐にしまっていた便箋を取り出す。

「……また会えるよね、アイちゃん」

私の声に応える人はいない。
私はそっとその手紙を破くと両手を広げた。
破かれた手紙は風にさらわれてはらはらと花びらのように宙を舞った。

1

猫の鳴き声がする。
猫なんて飼っとらんのに。耳元でにゃおにゃおと五月蝿い。
「あぁー、もう、うっさい！！」
音を遮断しようと布団を頭から被ると、猫は普段の動きからは考えられない速さで布団を勢いよくはがした。
マジでむかつく。寝起きのあたしは怒りっぽいのだ。
「ミユッ！！！」
怒りに任せて飛び起きると
「にゃぁお」
彼女は、おはようの代わりにそう鳴いた。
毎朝毎朝――正確には昼やけど――一人じゃ起きられんあたしを、こうして起こしてくれるのは正直助かる。やけど、起こすんなら――
「普通に起こしてよ」
「普通だよ」
「どこの世界に猫の鳴き声が普通の人がおるんよ」
「ここ、サラちゃんの目の前」
彼女はにこっと笑う。起き抜けから疲れさせてくれる。あたしは

嘆息と同時に、ベッドから飛び降りた。
こんな奴に構ってられん。出かける準備せんと。
顔を洗って歯を磨いて。
「今日は、危ないお仕事？」
仕事用の動きやすい服に着替えていると、彼女が問いかけてきた。
「今日？　どうやったかなぁ」
服の袖に腕を通し終えて、あたしは仕事用のウェストバッグを手に取ると、昨日、ギルドでプリントアウトしてきたスクラップリストを取り出す。
あたしが狙うのは、どちらかというと報酬がそう高くはない違法廃棄ロボットだ。
理由は簡単。報酬が高ければ高いほど命に関わってくるから。
あたしはお金のために命を掛ける気はまったくない。
一月に五体程倒せば、この街では上の下レベルの暮らしは維持できるんだから、体はって命はってバリバリ稼ぐ必要なんてないのだ。
最近は勝手に住み着いたこの猫娘のおかげであたしの生活レベルは中の上になっとうけど。まぁ、それはよしとする。
「危なくないよ」
「ホント？」
「うん」
答えながら、機関銃を肩にかける。この仕事は武器がないとはじまらない。
ジャケットの内側にはナイフ。本当は銃よりもこっちのほうが性にあっている。

でも、装甲の硬いロボットには歯が立たないから壊し屋になる前に銃の練習をした。

「それじゃ行ってくるけん、戸締りちゃんとしときね」

「行ってらっしゃーい」

ほわんとした声に見送られながら、あたしは戦場へと向かった。

※

走る。走る。走る。

曇天模様の空。空気は空の真似をしているのか濁っている。

息苦しくても、足を止めるわけにはいかない。

街のはずれ。道ともいえない道を、あたしとあたしから逃げるロボットのカシャカシャという足音だけが響く。それ以外は、とても静かだった。

ロボットがスクラップ場のフェンスをすごい跳躍力で飛び越える。

あたしも走ってきたそれを助走代わりにして、フェンスに飛びつきよじ登る。その間にロボットとの距離が開いていく。

さらに最悪なことにスクラップだらけのこの場所は、人間にはとても走りづらかった。

「ちぃっ！！」

舌打ちをしながらロボットに向かって銃を撃つ。

手がぶれて当たらない。ロボットは飛ぶように逃げる。

畜生！　畜生！　畜生！！

心の中で悪態をつきながら必死で追いかける。けれど、どう想定しても追いつけそうにはなかった。

それでも――まだ姿が見えてるうちに諦めるのは御免だ。あたしは蹴る足に力を込めた。

と、不意に、前を走っていたロボットがのけ反るようにして後ろのめりに倒れる。

「え？」

つまづいたにしては、あまりにも不自然な倒れ方。まるでなにかに吹き飛ばされたかのように、あたしの目には映った。

わけが分からないけれど、チャンスなのは確かだ。あたしは、スピードを上げる。

――瞬間、銃声。

思わず体を低くする。続けざまに、もう2発聞こえた。

なんだ？

あたしは視線を上げて――驚きに、目を見開いた。

視線の先にはあたしの追いかけていた違法廃棄ロボットが力なく倒れており、そのすぐ傍に一人の女が屈みこんでいる。

あたしも背が低いほうやけど、その女はもっと小さく見える。

一瞬、ジャンク拾いの子供かと思った。でも、その肩に掛けられている体には不釣合いの大きな物は、あたしの肩にかかっている物騒なものと似ていて、つまり――あれは同業者だ。

そして、今の状況が示しているのは1つ。

なんてことだ！　獲物を横取りされたんだ。

そのことに気づいたあたしは、慌ててその女の元に駆け寄った。

あたしの足音に気づいて、女が驚いたように顔を上げ、不思議そうに首をかしげた。

人の獲物（モノ）をとっておいてまったく悪びれた様子がない女に、あたしは苛立ちを覚える。

「ちょっと！！」

「なに？」

「それ、あたしがここまで追い詰めたんよ！！」

あたしは、ロボットを指差す。女は虚をつかれたようにぽかんとした。が、すぐにその顔にムカつく笑みが浮かぶ。

あたしは眉を寄せた。

「なんがおかしいん？」

「だってさぁ、あんたがここまで追いかけてきたからって、それがなに？　って感じなんだけど」

そいつはけらけらと、あたしを馬鹿にするように笑う。ものすごく腹が立ってきた。

いくら壊し屋がルール無しだからって、他人の獲物を横取りしないというのは暗黙の了解になっているはずだ。

「あたしの獲物を横取りしたいんやったら、力づくで奪ってみぃ！！」

あたしは、ナイフを手にした。女の顔から笑顔が消える。

これくらいで余裕なくすなんて意外に雑魚かもしれない。

「……横取りって人聞きが悪いよね。あんまりあたしを怒らせるとただじゃ置かないよ」

ジャキッという音。

あたしは目を疑った。女はロボットに向けるように自然な動作で、あたしに向かってライフルを向けたのだ。

ありえない。ありえない。ありえない。

ニヤニヤした女の表情から本気で撃つ気はないとは思ったけれど、つい後ずさってしまう。足元のスクラップがガシャガシャと音を立てた。

「っ！」

危うくこけそうになってしまう。

「きゃはは、ドジなヤツー」

女が手を叩いて笑う。

こいつ、本当にムカつくヤツだ。

あたしは、手にしていたナイフをぎゅっと握り締める。

「笑ってられんのも今のうちやけね！！」

「ほほぉっ！！　どうするつもり？」

「こうするつもりたい！！！」

女に向かってナイフを投げる。

もちろん脅しで、本当に当てるつもりはない。

しかし――

「おっ！！ヤル気か！！」

女はなにを勘違いしたのか嬉々としてそう叫ぶと、あたしに向かって、ライフルをぶっ放してきた。

「うわっ！！」

「キャハハ！！　おら、かかってこいよっ！！」

薬でもキメてるかのようなハイテンション。

な、なんなん！？　なんなん、こいつ。おかしい。頭がおかしい。

私の頭の中で、ピカピカと危険信号が点滅しはじめる。

「ちょ、ちょっとあんた……」

あたしが口を開いた時、すぐ傍でキーンという音がした。耳元を銃弾が通り過ぎたんだ。

殺される。

そう思った瞬間、あたしは全速力で女に背を向けて走り始めていた。

「冗談だよ、バーカ！！」

背後からそんな声が投げかけられたけど、あたしは止まらなかった。

気がつくと、あたしはアパートのすぐ近くまで戻って来ていた。
後ろを見て、あの女が追いかけてきていないことを確認する。

よし、逃げ切った。

安堵からか膝から下の力が抜けてくる。
あたしは、そのまま壁に体を預けて、ずるずると地べたに座り込んだ。
鼓動の音が体中に響いている。息苦しくて、あたしは少し頭をさげた。

「どうした、気分悪いのか」

不意に頭の上からそんな声がかけられた。
顔を上げると、顔見知りのおじさんが心配そうに眉を寄せあたしを見下ろしていた。
あたしは首を振って、それに応える。息が上がっていて、どうにもまともな返事を返せそうになかった。

「家帰って寝ろよ」

おじさんは苦笑し、あたしの頭をポンと叩くとそのまま行ってしまった。
言われなくても、そうするつもりだ。おじさんの後姿を見送って、あたしはよろよろと立ち上がった。

※※

「……ただいま」
「あれぇ？」

部屋に入ると、ベッドの上に転がったまま彼女が不思議そうに目をくるくるさせた。

「なん？」

仕事着を放り投げながら彼女を睨む。
「あれぇ？　あれぇ？」と、不思議そうに何度も繰り返していた彼女はビクリと身を竦ませ

「サラちゃん、機嫌悪い？」

むくりと体を起こして言った。

「超悪い」
「なんかあった？」
「あった」
「なにがあったの？」

彼女は、興味津々といったふうにあたしを見つめてくる。
あたしは、機関銃を棚にしまう振りで彼女に背を向ける。
獲物を横取りされて逃げ帰ってきたなんて言えるわけがない。それは、あたしのプライドが許さなかった。だから　――

「ミユには関係ないよ」

そう答えたのに。
彼女は、それを許してはくれなかった。
「にゃぁ〜お」
そんな声と同時に背中に重みが加わる。あたしはよろけて棚にごつんと頭をぶつけた。
「ちょっとミユッ！！」
「にゃぁお」
あたしの怒りの声に得意の猫声で返事をする彼女。
「重いっ！！」
「にゃぁお」
こうなってしまったら、しばらく放っておくのが一番なんやけど、今回はいつもと少し違う。
「にゃぁあああ！！」
ゆっさゆっさと体を揺さぶられる。
「ミユッ、やめてって！！」
「にゃーお」
言わないと、絶対にやめない気だ、こいつ。
ゆっさゆっさ。
にゃーおにゃーお。

ゆっさゆっさ。
にゃーおにゃーお。

「……分かった、もう言うけん、のいてっ！！」

いい加減、根負けして、あたしはついそう叫んでしまった。

「ホント？」
「ほんと」
「じゃぁ、おりる」

ふっと体にのっていた重りが消える。
あたしは伸びをして、ベッドに腰掛ける。彼女もチョコンとあたしの隣に座った。
まるで、寝る前の御伽噺を待つ子供のような顔であたしを見つめてくる。あんまり期待されても困る。

「……大したことやないんよ」
「うん、分かってる」

期待されても困るけど、あっさり頷かれてもむかつく。乙女心は複雑だ。

「単に、ムカつく壊し屋に会っただけ」
「ムカつく壊し屋？」
「そう、人の獲物を横取りするような壊し屋の風上にも置けない最低最悪のどチビ！！」

話しているうちにふつふつと怒りが蘇ってきた。

「いきなり、あたしに向かって発砲してきたんよ！　あいつ、絶対頭おかしい！！」
「サラちゃん？」
「今度会ったら絶対殺してやるけんね！！」
「サラちゃん、落ち着こうよ」

あたしの言葉に、彼女がのんびりとした口調で言う。
「はぁ！？　これが落ち着ける話なわけないやろ！！」
「でも、人殺したら捕まっちゃうよ」
「別にあたしが捕まってもミユには関係ないやん」
「サラちゃんがいなくなったら困るよ」

急に真剣な顔になって彼女がそう言うから
「へ？」

あたしは驚いてポカンと口を開けてしまった。

だって、彼女は毎日三時間は鏡を見ているほどの自分大好き人間で、他人の心配なんてするようなタマじゃないから、あたしが捕まろうが、どっかでのたれ死んでようが、なんとも思わないような気がしていたのだ。
でも、そうじゃなかったんだ。
「……な、なんで、あたしが捕まったら困るん？」
あたしの問いに、彼女は小首をちょこんと傾けて言った。

「だって、サラちゃんが捕まっちゃったら、私、行くところなくなっちゃうよ」
「はぁっ！？」
あまりにあんまりな答えに、あたしは先程とは違う意味で口を開けた。
「サラちゃんみたいに私の面倒見てくれる人少ないもん」
彼女は、嬉しそうにふふっと笑う。
そうだ、こいつはそういうヤツやったんや。期待したあたしがバカやった。
「……もう寝る」
言いながらあたしが頭から布団を被ると
「ホントに困るよ？」
彼女のそんな声が聞こえた。
聞いた瞬間、勝手に困ればいいやん、そう思ったけど結局言わなかった。
明日もきっと猫の鳴き声で起こされるんだろう。

1

サラちゃんがＩＤカードの入ったバッグを忘れた。それがないと、折角、つかまえた違法投棄ロボットのスクラップ申請ができないらしい。

だから、サラちゃんのいる警察署まで届けてあげることにした。

「にゃぁお♪」

目的のあるお出かけは久しぶり。

外は私のためにいいお天気。太陽にも愛されるキュートな私。

警察署まで歩いて３０分。バスで１０分。今日は歩こう。天気がいいから

てくてくてくてく――そろそろ、私の大好きなピンク色の看板のリサイクルショップが見えてくるはず……

あれ？

私は目を疑った。

大好きな――多分、私のためにつくられた――あのピンク色の看板がいつのまにかなくなっている。

「……にゃぁぁ」

よく見ると店の名前も以前と変わっているような気がする。少し落ち込む。

でも、このまま止まっているわけにはいかないんだ。

サラちゃんが、可愛い私の到着を首を長くして待っているはずだ

から。

「にゃぁ！」

景気づけに鳴いてみる。すると

「にゃあ！！」

後ろから私の鳴き声の真似。驚いて振り返ると、見知らぬ女の子が立っていた。

『初対面の人と話す時は、敬語使うんよ』

サラちゃんが教えてくれたことを思い出す。

「……なにか用、ですか？」

言うと、女の子は目を丸くした。

おかしなこと言ったかなぁ？　不安になってくる。

「あの……」

「なーんだ。あなた、喋れるんですね。猫語が話せるのかと思ってましたよ」

「え？」

言葉の意味がよく分からないので聞き返すと「いえ、そこのお店から出たら、たまたまあなたの鳴き声が聞こえたんで、ついつられてしまっただけです」と、女の子は私好みじゃなくなったリサイクルショップを指差しながら笑った。

おかしな人だ。

『おかしな人に近づいちゃいけんよ』

またサラちゃんの言葉を思い出す。

そうだ、近づいちゃダメなんだ。逃げなきゃ。そう思った瞬間

「あ、そうだ。私、ついでにあなたに道を聞きたかったんですけど」

女の子がポンと手を叩いて言った。

「え？」

「実はですねぇ、警察署に行きたいんですよ、私」

「警察署？」

「はい。以前、行った事があったので教えてもらわなくても大丈夫かと思ったんですけど、どうも場所が変わったみたいで、迷ってしまいまして」

困ったものです、と女の子は頭に手をやった。

おかしな人だし。サラちゃんの言いつけがあるし。でも、行き先は一緒だし。

チラリと窺うと、女の子は誰かと待ち合わせでもしているのか時計を気にしながら「まずいなぁ」と呟いている。

本当に困っているみたいだ。

うーん。

おかしな人だけど。サラちゃんの言いつけがあるけど。行き先は一緒だから。

「案内します」
「本当ですか！！」
「私も警察署に行くから」
「助かります」
女の子は、本当に嬉しそうに言った。

※

女の子はパルシアルさんと名乗った。私はミユミユと名乗った。
パルシアルさんが警察署で待ち合わせをしている人は、壊し屋さんをしているそうだ。サラちゃんと一緒だ。
その壊し屋さんは、小さいのに威張っていて短気でガサツで喧嘩っ早いらしい。どことなくサラちゃんに似ている。私がそう言うとパルシアルさんは「壊し屋さんはそういう方がなる職業なんですかねぇ」と、のんびりした口調で言った。
そうかもしれない。

「まぁ、意外と優しいところもあるんですけどね」
「優しい？」
「えぇ、行くあてのない私を家に置いてくれましたし」
「あ」
「なにか？」
「サラちゃんもそう。私をお家にいれてくれた」
「そうですかぁ。ミユミユさんと私も似てますね」
「壊し屋さんは私たちみたいな人に弱いのかもしれないかもですかねぇ」

パルシアルさんのセリフを真似してみた。慣れなくて変な感じだ。
パルシアルさんは、しみじみと微笑み「優しいのはいいことです」と、なんだかおばあちゃんみたいに言った。

警察署が見えてきた。入り口に、不機嫌そうな顔をしたサラちゃんが立っている。

「ミユッ！！」

サラちゃんは、私を見つけるとすぐに走って来た。
そんなに急がなくても、ＩＤカードも私も逃げないのに。

「ミユ、誰そいつ？」

駆けつけてくるなり、サラちゃんは不審げな眼差しをパルシアルさんに向ける。
失礼にあたる。よくないことだ。サラちゃんの質問には答えずに、バッグからＩＤカードを取り出す。

「はい、ＩＤカード」
「ありがと。やなくて、この人誰なん？」

私が質問を無視したからサラちゃんは怒ったみたいだ。視線が怖い。

「ミユ」
「ミユミユさんにここまで道案内をしていただきました。私、パルシアルと申します」

サラちゃんの問い詰める声に、パルシアルさんが丁寧な調子で挨拶した。

「道案内？」

サラちゃんがじろりと私を見る。私は何度も頷いて「そうなの、迷ってたから。パルシアルさんも警察署に用があって」と、サラちゃんに事情を説明した。

「……ふーん、そう」

私の言葉に、サラちゃんはやっと笑顔を見せてくれた。現金なものだ。

「それじゃ、ちょっと待っとってね。すぐ申請してくるけん」

サラちゃんは、ＩＤカードをヒラヒラとかざしながら、警察署に戻っていった。

※

「ご一緒しますよ」

入り口の階段でサラちゃんを待つことにした私の隣にパルシアルさんが座った。

待ち合わせをしている壊し屋さんは、いいのかな？　私のせいで、パルシアルさんが怒られるのは嫌だった。

「大丈夫ですよ。私の壊し屋さんもまだ中にいるみたいですから」
まだ聞いてもいないのに、パルシアルさんが私の心を読んだので吃驚した。
でも、大丈夫ならいいかな。一人で待つよりは楽しいし。そうだ。さっきのサラちゃんの失礼を謝らないと。なんたって、私はサラちゃんのパートナーなんだから。パートナーの失礼は私の失礼だ。
「サラちゃん、短気でごめんなさい」
言うと、パルシアルさんは首を振った。
「サラさんは、あなたのことを大切にしてくれてるんですねぇ」
「短気なだけです」
「またまた」
「この間も、他の壊し屋さんと喧嘩して、怒って帰ってきたし」
私の言葉にパルシアルさんは「ほぅ」と頷いた。
「これまた奇遇ですね」
「奇遇？」
「私が一緒に暮らしてる壊し屋さんも、この間、他の壊し屋さんと喧嘩したって言ってました。なぜだか上機嫌でしたけどね」
「そうなんですか」
「壊し屋さん同士の喧嘩が流行ってるんですかねぇ」
パルシアルさんは事も無げに物騒なことを言ってくれる。　私は顔をしかめた。
サラちゃんが怪我したら嫌だから、喧嘩なんて流行ってほしくな

い。
パルシアルさんは、一緒に暮らしている小さな壊し屋さんのことが心配じゃないのかな？
彼女の表情からは、よく分からない。
「パル！！　そんなとこでなにしてんの！！　すぐに来いって言っただろ！」
突然、頭の上からそんな声が降ってきた。
いつの間にか後ろに人が立っていた。金髪の小さな女の人だ。
ひと目で、その人がパルシアルさんと一緒に暮らしている壊し屋さんだと分かる。だって、本当に背ちっちゃい。
「短気な壊し屋さんの相手は、大変だと言う話です」
パルシアルさんが振り返りながら言う。
「はぁっ！？　誰のことだよ、それ」
「誰のことでしょうねぇ」
パルシアルさんは楽しげに私にウィンクする。
「ったく、あんたはろくな話をしない」
女の人は眉間に皺を寄せた。
「ほら、行くよ」
パルシアルさんの肩を叩いて、女の人は階段を下りはじめる。
パルシアルさんは私を見て肩をすくめ、「せっかちですねぇ」と、

女の人の背中に声を投げる。

「さっきヤバいヤツがいたんだよ」

「ヤバいって？」

「この間、ちょっと遊んでやった壊し屋。見つかったら、色々面倒になるじゃん」

女の人は最後の段をぴょんと飛んで、こちらを振り返った。そして、あんぐりと口を開けた。

私もパルシアルさんも彼女の視線の先、後ろを振り返る。

入り口から飛び出してきたのは、サラちゃんだった。

私のことなど目もくれず視線をキョロキョロと彷徨わせ

「きさん、逃げんなーっ！！！」

女の人を視界に捕らえるなり、大声で叫んだ。

「ホラ見ろ、のんびりしてるせいで見つかったじゃんか」

「ウソばっかり。最初から見つかってたんじゃないですか」

「どっちでもいいだろ。パル、逃げるぞっ！！」

女の人は、走り出す。

パルシアルさんは、サラちゃんと女の人を見てなにか悟ったのか

「それじゃ、ミユミユさん。私はこれで」階段を全て飛び抜かして、風のような速さで女の人のあとを追いかけていった。

「待て、こるぁっ！！」

サラちゃんは私を素通りして銃を片手に階段を駆け下りる。

待っててあげたのにひどい。

「サラちゃんっ！！」
呼び止める。
「……あ、ミユ」
階段を一段残したところで、サラちゃんは思い出したような顔で止まった。
やっぱり忘れてたんだ。
「ひどい」
「……あ、いや、その」
「知り合い？」
「知り合いもなんも、この間、話したむかつく壊し屋だよ、あいつ」
「にゃあぁ」
すごい偶然だ。
驚いている間に、サラちゃんは私じゃなくて小さくなっていく女の人とパルシアルさんの姿に目を向けていた。
いくら喧嘩相手を見つけたからといって、こんなに可愛い私がいるのに他の人の――しかも、背中に目を向けるなんて失礼だ。
「ミユ！　あたし、ちょっとあいつ追っかけ」
「にゃぁお！！」
喧嘩相手を追いかけようなんてバカなことを言い出しかけたサラちゃんに私は飛び猫パンチをくらわせた。

「んべっ」

間抜けな声を発して、サラちゃんが階段を転げ落ちる。

喧嘩はよくない。それに私をないがしろにするのも問題だ。

これだから、短気で喧嘩っぱやい壊し屋さんの面倒を見るのは大変。

「にゃぁお」

当分、目を覚ましそうにないサラちゃんを背負って、私は家へと歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6813x/

carvaly

2011年12月21日23時54分発行